

# 咲—Saki—旅巡り編

ウメ、

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一人の少女が友達と一緒にいたいと頑張るお話。

一人の少女が強くなりたいと迷いさまようお話。

初投稿になります。

台本形式ですが、小説を形にするのは初めてです。  
なので変なところもあると思いますが、楽しんでいただけると幸い  
です。

おそらく関西弁が違和感バリバリです。

あと一言でも感想をいただけるととても喜びます。

目  
次

プロローグ 1													
プロローグ 2													
新道寺の巻 1													
新道寺の巻 2													
永水の巻 1													
永水の巻 2													
幕間													
阿知賀の巻 1													
阿知賀の巻 2													
白糸台の巻 1													
白糸台の巻 2													
白糸台の巻 3													
エピローグ													
	197	187	165	146	131	119	106	84	68	46	35	18	1

# プロローグ1

竜華「なあ、そろそろ動き出さん?」ナデナデ

怜「うーん、まだいいやん」ゴロゴロ

竜華「そんなことい言うてたら着く頃には、日が暮れてまうやろ」

怜「そうは言うても道わからんしなあ」

竜華「歩いてる人にでも聞いたええやん」

竜華「そもそも初めての場所行くのに何で調べなかつたん?」

怜「ちやんと調べたんやで。プリントした紙、家に忘れたけど

竜華「意味ないやん」

怜「気づいたときは焦つたで」ゴロゴロ

竜華「ぜんぜん焦つてるふうには見えんよ」

怜「そろそろ行かんといかんなあ」

竜華「そういうわりには動く素振りないやん」

怜「うーん、このふとももが気持ちいいのが悪いわ。」サスサス

竜華「こつ、こんなところで何言うてん」////////

怜「竜華の膝枕がいかに素晴らしいかについて」

竜華「そんなん今日は聞いとる時間ないよ」チョットキキタイ

怜「えー♡」

竜華「えー、やない。そんな可愛らしくいつても変わらんよ。」ウズツ

怜「えー」ボー

竜華「ほらほら、しゃきつとせな」

怜「そうやな。ほなあの人らに道聞こか」

咲「うう、今日は一段と寒いね」ブルツ

京太郎「そつか？まだマフラーとか無くてもどうにかなるけどな」

咲「駄目だよ、ちゃんと着ないと風邪ひくよ、京ちゃん」

京太郎「大丈夫だつて、咲が弱すぎるんだよ」

咲「もう冬休みだよ」

「すみませーん。」ブンブン

咲「どこかで見たことあるような、京ちゃん知り合い？」ウーン

京太郎「いんや、和なみの人なんて見たら忘れないと思う」

咲「どこ見ていつてるのかな?」ニコ

京太郎「

竜華「清澄高校までの道教えてほしいんやけど…」

怜「ちよいまち竜華、あの髪型つて確か清澄の…」ツノ?

竜華「んー?そやつ!!大将の咲ちゃんやん!はじめましてやな。決勝見てたよー、ほんま感動したわ。いやー会えてうれしいわ、一度会つて話してみたかつたんよ。それにしてもかわいいいなあ、ウチもこんな妹ほしかったわ、チャンピオンがうらやましい限りや」

咲「

怜「ストップ。咲ちゃん固まつてもうてるやん」

竜華「せやかで、これから会おうつて人にこんなとこでたまたま会えたんやで」

咲「ううつ」

怜「ほら、咲ちゃん困つてるから、まずは自己紹介せな。ウチは園城寺怜、インハイでは千里山女子高校の先鋒やつたつていえば、わからるか?」

咲「千里山の…はい思い出しました。確かお姉ちゃんと戦つて倒れた…、体調は大丈夫なんですか?」

怜「そんな心配せんでも大丈夫やで、もともと病弱やつたのと、あの時はちょーと無理し過ぎただけやから」

咲「よかつたです、初めて映像見たときは私も血の気が引きました」

竜華「ホントあの時は、こつちが倒れるかと思つたわ、咲ちゃんからも無理せんよう言うてや」

怜「いいから、はよ自己紹介せえ」

竜華「ウチは大将やつとつた清水谷竜華や。もうちよつとで咲ちゃんといンハイで戦えたのに、惜しいことしたわ」

京太郎「俺は清澄高校雀部の須賀京太郎つて言います。お二人は、またなんでこんなところに？」

竜華「あれ竹井さんに聞いとらん？今日練習にお邪魔することになつてると思うんやけど？」

京太郎「部長からは聞いてないです。咲お前は？」

咲「ううん、私も聞いてないかな。」

京太郎「そうか、でもそういうことなら部室まで案内しますよ。ちょうど向かう途中でしたし。」

咲「あれ、今日は用事があるんじや…」

京太郎「まだ時間に余裕あるし、お前一人じやどこ行くかわかんねえからな」

咲「部室行くのに迷うわけないでしょ、京ちゃんは私を何だと思ってるの？」

京太郎「前科があり過ぎるんだよ」

竜華「あの二人仲ええなあ」

怜「なあ二人は付き合ってるん?」

咲「彼女違います」

咲「すみません、遅れました」

和「おはようございます、咲さん」

久「咲が遅刻なんて珍しいわね。そうそう今日はサプライズがあるのよ」

優希「部長さつきからそればっかりで何も教えてくれないんだじえ」

久「きつと驚くわよー」

咲「あはは、それが…」

竜華「お邪魔します、突然の申し出を受けていただきありがとうございます。千里山の清水谷竜華です」

怜「同じく、園城寺怜です。今日はよろしゅうお願ひします」

和「つまり園城寺さんの特訓のために二人は来たということですか」

怜「まあ簡単に言えばそやね。具体的には咲ちゃんに聞きたいことがあります」

咲「私ですか？」

怜「そうやで、まあ目的の半分は清澄さんと話して打つてみたかつたんやけどな」

優希「私たちも有名になつたもんだじえ。夏に頑張ったかいがあるじえ」

和「確かに千里山の方に言つていただけるのは光榮ですね」

久「取り敢えず一局打つてからにしない、こんな機会めつたにないし時間が惜しいわ」

まこ「そうじやね、ほらせつかくじやから咲入りんしゃい」

和「じやあもう一人は私が入ります。園城寺さん、清水谷さんよろしくお願ひします」

1 恵33400 2 和31000 3 龍華20600 4 咲15  
000

咲「・・・・・」

龍華「咲ちゃんは調子悪そうやつたけど、二人ともインハイで見た時より強くなつとるな」

和「ありがとうございます。誰が勝つてもおかしくない対局でした」

まこ「園城寺さんはさすがじやね、清水谷さんはちよつとついとらんかつたな」

優希「あの立直一発はあこがれるじよ。私も立直棒立てればできるかな」

まこ「そんな簡単なもんじやないじやろ」

恵「いやいや、そんなことあらへんよ。優希ちゃんも立ててみ

優希「マジか！さつそく立てる練習するじよ」

龍華「あんまりてきとうなこと言つたらアカンよ」

恵「立直棒仲間増やしたかつたんやけど」

まこ「立直棒仲間つてなんなんじや」

久「それにしても園城寺さんが1巡先を見るつてのは本当なの

ね」

和「そんなオカルトありません!」

怜「えつ!? 一応本当なんやけど・・・」

優希「あんま気にしなくてもいいじよ。のどちらんはいつものこと  
だじえ」

久「全国の名門のエースともなるとやつぱり違うわね」

竜華「ウチら自慢のエースやからな」 ドヤ

怜「なんで竜華が得意そんなんやねん」

久「みんなが二人に勝てるようになれば、来年のインンターハイは清  
澄のものよ」

まこ「気が早いのぉ」

和「でも一理ありますね」

竜華「そう簡単には負けへんよ」

怜「ウチらに勝てても来年の千里山はもつと強いで。・・・多分」

竜華「船Qは問題あらへんけど、泉大丈夫やろか?」

久「随分不安そうね」

咲「それよりもっと打ちましょう、園城寺さんともっと打ちたいで

す」

怜「嬉しい」と言つてくれるやん、ほなどんどん打とか」

優希「いつちよやるじえー！」

怜「いやー打つた打つた、ここまで打つたのは久しぶりやな」

優希「燃え尽きたじえ・・・」モウダメ

和「さすがにお二人ともお強いですね、勉強になりました。ですが  
よかつたんですか？」

怜「ん、何がや？」

和「もともと咲さんに何かを聞きたいというお話だつたような？」

怜・竜華「・・・・あつ!!」

竜華「楽しくて、すっかり忘れてもうたな」

怜「やつてしまたな。大事な話やつたんやけど」

咲「大事な話なら今からでも・・・」

久「今からでも間に合うの？」

怜「今からじや間に合わへんと思う」

まこ「どうするんじや？」

久「確かに今日はこっちに泊まるつて言つてたわよね、明日もう一度集まつたりはできるの？」

怜「大丈夫やで」

竜華「手間かけさせてもうすみません。ウチが付いていながら」

優希「別にそんなの気にしないじえ、なあ咲ちゃん？」

咲「ええと……」アワワ

久「咲、明日なにがあるの？」

咲「実は衣ちゃんと龍門渕家にお呼ばれしてまして」

久「それなら大丈夫なんじやない、龍門渕ならこの二人を連れてつたら喜びそうだけど」

まこ「天江衣は大喜びじやろな」

和「そんな勝手に決めていいんですか？向こうの都合もあるでしょうし。千里山のお二人もまだ……」

怜「ウチらはもちろんオツケーで。むしろあの天江衣に会えるなら万々歳や」

久「そういうことなら大丈夫だとは思うけど、一応透華に連絡してくるわ」

優希「相変わらず部長は手がはやいじえ」

まこ「それだと意味が変わつてくるがの」

竜華「竹井さんは顔が広いんやね、今回連絡とるときは姫松の愛宕洋枝に連絡先聞いたんよ」

優希「さすがは我らが部長だじえ」

久「透華は大丈夫ですって。明日咲と一緒に迎えをよこすそうよ」

竜華「こんな段取りまでしてもらつて、ほんま頭が上がらんわ」

久「いいのいいの。でもせつかくだし園城寺さんも連絡先交換しきましょ、あとで連絡するわ。」

竜華「そやね。竹井さんは来年はどうするか決まつてるんか?」

久「大学に進学するつもりよ。推薦の話ももらつてるしね」

竜華「竹井さんなら1年からインカレでも活躍しそうやな」

久「あら嬉しいこと言つてくれるわね。清水谷さんこそプロでもやれるんじゃない、モデルとかもやつたりしたら、きっと人気出るわよ」

竜華「竹井さんこそもてそうな雰囲気しとるよ」

久「久でいいわよ。私も竜華って呼ぶから」

咲「園城寺さんすみません。私も気にはなつてたんですけど、清水谷さんすゞい楽しそうだつたんで、ついいいかなつて」

怜「咲ちゃんが氣にすることやないで。竜華は部活の時はしつかりしてるんやけど、時々天然なところがあるんよな」

咲「いいじやないですか、園城寺さんと二人でとてもいいコンビだと思います」

怜「咲ちゃん、そろそろ名前で呼んでくれてええんやで？ 一日中一緒におつた仲やろ」

咲「誤解を生みそうな表現はやめてください」

怜「事実やん。やっぱ早く仲よくなるには名前で呼ぶのは効果的だと思うんよ」

咲「うーん・・・わかりました、私も園城寺さんとは仲良くしていきたいですし」

怜「ジー

咲「そんなに見つめないでください、緊張しちゃいますよ」 //

怜「ハイクハイク

咲「と・・・と・・・ところで私に聞きたいことがあつたんですよ  
ね？」

怜「期待させといてそれかいな」ハア

咲「…・・・怜さんが見つめるから変に緊張しちやつたんですよ」

怜「そのぐらいで緊張してちや大将は・・・ん、今？」

咲「なんですか？」

怜「聞き取れへんかったからもう一回言つてくれへん？」

咲「ほらほら、聞きたいことあつたんですよね？」

怜「露骨に話変えんでも」チツ

咲「お姉ちゃんのこととかですか？」

怜「聞きたかつたのは、咲ちゃんのことやで。前から気になつとつ  
たんよ、咲ちゃんの太もも」

咲「ええええええ」

怜「前からつてのは冗談やけどな」

咲「もうからかわないでください」

怜「でも実際、なかなかのものやと思うで。幼いころから竜華に膝  
枕され続けているウチが言うんやから間違いあらへん。せつかくや

し確かめてみよか?」ホラホラ

咲「膝枕なんて恥ずかしいですよ。他に人もいますし」

怜「なんや? 一人だけならやつてくれるんか?」

咲「そういうことじやないです」

怜「意外とケチやな」チツ

咲「ケチじやありません! もうやりませんよ」プンプン

怜「堪忍なあ。一生のお願いや」

咲「随分安い一生のお願いですね。でもそれなら二人にだけになれたらやつてもいいですよ」フフ

怜「マジか!?」

咲「ええ、別に減るものでもないですし」

怜「でもそんな簡単に知らない人と二人きりになつたらいけんよ。かわいいんやから、もつと気をつけんと」

咲「お願ひしたじやないですか!?」

怜「一生のお願いなんて簡単に聞いたらいけんよ」

咲「なんで私が説教されてるんですか!?

怜「なんや予想以上にちよろそやつたから心配になつてしまふ

て

咲「ちよろくないです!!」

咲「それにその台詞だと言い出しつべの怜さんが危ない人ですね」

怜「人を変態みたいに言うなや。ウチは他の人より少ーしだけ女の子の太ももと膝枕が好きなだけや!!」ビシ

咲「十分変態です!でも私だつて相手はしつかり選んでるつもりですよ」

怜「ウチを選んでくれたんか?嬉しいわ半分冗談だつたんやけど」

咲「じゃあやめときますか?」

怜「それも冗談や。竜華とはまた違う良さがあるんやろな、特に景色とか」

咲「今どこ見ていいました?」

怜「竜華は大きいのはいいんやけど、たまに自分と比べて虚しくなるからな」

咲「竜華さんや和ちゃんがおかしいんですよ、私だつてまだこれから大きくなるはず・・・です・・・。」グヌツ

怜「そこまで気にせんくても、私かて3年生でこんなもんやで」

咲「怜さんつて見た目よりありますよね」ジー

怜「恨めしそうに見んでくれや。照にも同じようなこと言われて睨まれたこと思い出したわ」ヒキツ

咲「引かないでください！それよりお姉ちゃんと仲がいいんですか？」

怜「インハイの後、一度だけ合同の取材があつて同じような話になつて言われたんよ。その時に咲ちゃんの話もいろいろ聞いたで」

咲「お姉ちゃんは何を話してました？」

怜「なかなか面白いお姉ちゃんやな、咲ちゃんの自慢しとつたよ。麻雀やつてる時とはイメージが180度変わるし、ほんと似たもの姉妹やな」

咲「お姉ちゃん・・・」ハア

久「盛り上がつてるとこ悪いけど、そろそろお開きよー」

怜「もうかいな。つて膝枕してもらつてない」

咲「膝枕はどうでもいいんですけど、結局怜さんの質問聞いてませんでしたね」

怜「どうでもいい！」

和「膝枕!?」

怜「コホン、まあ聞きたい」とつてのは能力に関することなんやけど、明日天江衣と会えるんやろ。そしたらそん時一緒に聞いてもらうわ

咲「衣ちゃんと透華さんがいれば大抵のことは解決してくれると思  
いますよ」

怜「明日が楽しみやな」

咲「私もです」フフ

和「やけに仲がよくなつてますね。なんだか嫌な予感が・・・」

優希「のどちらん、大丈夫かー?」

久「それでも咲は随分なついたわね」

竜華「怜も楽しそうやし気が合うんやろな」

まこ「完全に二人の世界に入つとつたな」

久「咲、楽しいのは分かるけど続きは明日にしなさい。あと園城寺  
さんと清水谷さんのこと龍門渕によるしくね」

和「咲さん私も一緒にできればよかつたんですけど…」

咲「和ちゃんは明日から家族で東京なんですよ、しようがないよ楽  
しんできてね」

和「そうですかね…、咲さんこそ楽しんできてくださいね」

咲「うん。怜さんと竜華さん明日もよろしくお願ひします」

怜「こちらこそよろしく頼むわ」

## プロローグ2

「龍門渕邸」

怜「アゼン

竜華「ホントにここが龍門渕なんか？」

咲「私も初めて来たときは驚きました」

ハギヨシ「こちらのお部屋になります。中で透華お嬢様がお待ちです」

透華「お待ちしておりましたわ。あなた方が園城寺怜さん、清水谷竜華さんですわね」

竜華「本日はお招きありがとうございます。千里山女子高校の清水谷竜華です。急にお邪魔してしまってすんません」

怜「園城寺怜です。今日はよろしゅうお願ひします」

衣「遠路大義、衣は天江衣だ。久からは二人はとびきりの雀士だと聞いている。さあ早く麻雀しよう。」

怜「ずっと気になつとつたんやけど、そのウサ耳カチユーシャかわいいなあ」

衣「衣のお気に入りだ」フフン

怜「衣ちゃんかわええなあ」ナデナデ

咲「怜さんから私と衣ちゃんに話したいことがあるみたいなんだけ  
ど・・・」

衣「ちやんではなく!!」

透華「麻雀を打ちに来たと聞いていましたけど？」

竜華「そうなんだけど、先に私たちから聞いてもらいたい話がある  
んよ。いいやろか？」

衣「客人の願いを聞かぬわけにもいくまい、なあ透華？」

透華「そうですわね。では、お茶菓子を用意しますので先にお茶に  
しましようが、ハギヨシ!!」パンパン

透華「準備できましたわね、それでは怜さんお願ひしますわ」

怜「单刀直入に言うとな、ウチに能力の使い方を教えてほしいんや」

咲「園城寺さんの能力つていうと、1巡先が見える”ですよね? イ  
ンハイで解説の人人が言つてましたけど」

怜「その通りや、三尋木プロのお陰で一気に有名になつてしまふた」

透華「にわかには信じられませんね」

怜「ただ無理をすれば2巡先や3巡先も見えるんやけど、見れば見るほど疲れるんよ。もともと病弱なこともあつてインターハイでは倒れてしまつてな、いろんな人に迷惑かけてしもたわ」

竜華「体力がないのもそうやけど怜はすぐに無理するんやから、そつちのほうが問題や。何回言つても聞かんし、一人で考えて勝手に限界を無視して・・・」

怜「竜華の言う通りやつたな」

衣「だつた、ということは今は変わつたのだな？」

怜「さすがのウチもインハイで懲りてな。インハイまでは2巡先・3巡先を見ようと密かに特訓してたんやけど、インハイ終わつてからは地力を上げて今使える能力を最大限に活かせるように練習しとる」

透華「私もそれが良いとります」

怜「最近だと原村和の牌譜検討とかよくやつてるわ」

透華「それはわかつてますわね。ぜひ後程一緒にやりましょう」

咲「でも今日は能力の使い方を教えてほしいうつていうお願ひでしたよね？」

衣「そうだ、矛盾しているではないか」

怜「最近になつてちょっとばかり事情が変わつてな。できるだけ早く力をつけたいんや」

衣「それはまた急な心変わりだな」

怜「自分でもそう思う、ただ照や憩ちゃんを見るとと思うんよ。あのレベルの選手に勝つために、地力を鍛えてたら時間がかかりすぎる」

咲「時間がないですか？」

透華「その“事情”というのは教えてくださいないのかしら？」

怜「申し訳ないんやけど、約束やから教えられないんです」

衣「約束か・・・竜華はいいのか？怜は今まさに無理をしようとしているように見えるのだが」

竜華「怜は今回のことウチとセーラに真っ先に相談してくれたんですよ。それで三人で相談した結果が今回の旅や」

透華「了解済みということですわね」

怜「最初はプロに直接教えてもらおうと思ったんやけど、年末年始はプロは忙しそうやから。インハイで成績残した人らに頼つてみようと思つて、最初にインハイで印象に残つてた咲ちゃんがいる清澄にお願いしたんや」

透華「能力を鍛えるという方針自体には同意したということですわよね？」

竜華「そうや」

衣「ならば衣が言うことはない。存分に協力しよう！」

咲「…………」

衣「咲もいいだろう？」

咲「……大丈夫だよ、衣ちゃん。ただ私に教えてほしいというこ  
とでしたけど、私は人に教えられるほど強くありませんし、自身の能  
力についても使いこなせているとは言えないと思います。わざわざ  
訪ねてきてくださったのにすいません」

怜「そうなんか？あれで使えこなせてないとか末恐ろしいな」

衣「衣はそんなことないと思うのだが」

咲「ありがとうございます、でも最近勝率も悪いんだよね」

透華「能力の扱い方でしたら私も教わりたいですわね」

衣「よし、そういうことなら衣が教えてやろう」フフン

透華「衣、本当にできますの？私たちもそんな話聞いたことないん  
ですけど」

衣「とりあえず一局打つてみよう話はそれからだ」

透華「私は一たちを呼んできますわ。そろそろ仕事も終わつたころ  
だと思いますし」

「対局後」

怜「これが去年のMVPの実力か、あっぱれやな」

透華「満月の衣はこんなもんじやありませんわよ」

衣「怜はすごい能力を持つてるんだな、実際に打つてみてひしひしと感じたぞ。それに咲もやっぱり強くなっているな」

咲「そうなのかな？怜さんへのアドバイスは準備できた？」

衣「うむ。咲にも衣の年長たるところを見せよう。もう“ちゃん”とは呼べなくなるぞ」

咲「まだ氣にしてたんだね・・・」

衣「上手くいいたら“お姉さん”に直すんだ」フフ

衣「まず1つ質問だが、怜は能力の使用は自在にできるのか？」

怜「基本的にはできるで。自分が見た未来と行動を変えるとしばらく見えなくなるし、体力がなくなると見たくても見れなくなるけど」

衣「そうか・・・ふむ、ならありきたりだが少しずつ使いながら慣らしていくのはどうだ？」

怜「私はええ案やと思うんやけど・・・」

竜華「インハイ前にもそれやつて何回か倒れてるんや。それにたいして効果も上がつてへんのやろ」

怜「最初は2巡目は一度も見れなかつたんやけど、特訓後は無理すれば1局に何回かは見れるようになつたで」

竜華「無理すればじや、あかん。ぜつつつたい、アカン!!」

怜「この通りやから別の案にしてくれるとありがたいわ」

透華「そういえば目標とかはありませんの?」

怜「そうやな、常時2巡後を見れるくらいが理想やな、先は長いと思ふけど」

衣「ふむ・・・なら心構えの話になるが、怜は相手をもつと見下すように打つといいと感じる」

怜「見下す?」

衣「少し言葉が悪かつたな。対局相手を尊敬することも大事だが、戦いに勝利するには相手を飲み込み支配する、そんな戦い方も有効だ」

咲「衣さんは相手をいつも飲み込んでるよね」

衣「当然だ。1巡先が見える怜なら、相手の全てを見透かすような気概で挑んでみたらどうだ。全てを見通し支配するそんな戦いができるはずだ」

怜「相手を支配する、そんなこと考えたこともなかつたわ。でも相手を見透かすってのはなんとなくわかるかもや（照魔鏡・・・）」

衣「心の持ちようでその者の能力は良くも悪くも変わるように衣は思う」

透華「正直私には全然わからないアドバイスですわね。宮永さんはどうですか？」

咲「わかります。でも私にもうまくできません」

竜華「私もさつぱりやわ。でも怜は感じることがあるみたいやし、さつそく試してみよか」

一「透華お待たせ」

純「悪いな、遅くなつちまつた」

智樹「軽食を持ってきた」

透華「ナイスタイミングですわ、これで卓が二つ立ちますわね。でどんどん打ちますわよ」

（休憩中）

咲「怜さん、どうですか衣ちゃんの指導は?」

怜「麻雀部での指導なんかとは全く違うて面白いわ。これぞオカルト派の雀士つて感じやな」

咲「衣ちゃんが完全デジタルで打つてる姿は想像できませんね」

怜「ただな・・・、1局1局がしんどいわ。」ハア・：

咲「あのプレッシャーは恐いですよ、何度もやつても慣れません」  
怜「咲ちゃん、自分も大して変わらへんの自覚していないんか、咲ちゃんのほうがつらい局も普通にあるで」

咲「そ：そんなことないですよ？」メソラシ

怜「薄々わかってるやん」

咲「そつ、それより衣ちゃんにはどんなアドバイスされたんですか？2人が話してるの気になつてたんですね」

怜「ウチのことがそんなに気になるんか？」

咲「勘違いしないでください！そうじやありません！」

怜「おおう、ツンデレか」

咲「つんでれ？」

怜「天然かい！」

咲「天然じゃないです。それよりアドバイスです」

怜（絶対天然やろ）

怜「アドバイスは技術的などよりもメンタル面のことが多いな。一番可能性を感じたんは『未来を見る相手を絞る』っていうアイディアやな。使いこなせれば体力の節約になるかもや」

咲「なるほど、衣さんは思つていた以上にオカルトの先生に向いてるのかかもしれませんね」

怜「衣先生か。ガチな人からちよつと危ない人までいろんな人が集まりそやな」

衣「咲、怜ちよつと来てくれるか」

怜「さあ先生がお呼びや」

衣「先生？ 咲、次はこの面子で全力で撃つぞ。怜は透華の後ろで見ていてくれ」

竜華「よろしくな」

透華「お願ひしますわ」

咲「冷たい透華さんを呼ぶの？」

衣「そうだ、あれはまさしく長野最強に相応しい。今日の締めに良いかと思つてな」

怜（冷たい透華？）

透華「あまり気は乗りませんが、衣のお願いでは仕方ありませんわ」

竜華「本当にそんなに強いのか楽しみや」

咲「わかりました、やりましょう」

「対局終了」

怜「何やこれ？」

衣「透華こそがこの長野で最強の選手だ、合宿ではプロにも勝利しているぞ」

竜華「話は聞いたけど、これは尋常じゃないなあ。とんでもない選手が隠れてるもんやね」

衣「怜は竜華と交代だ。今日最後の一局だからな怜も残れる力を振り絞つて打て」

竜華「怜っ!?」

怜「わかってるよ、ダブル以上は使わん。今無理せず使える全力で挑む、その上で勝つ、これでええやろ？」

竜華「怜つ頑張り。全力で応援したる!!」

衣「それから今の透華はまるで卓の全てを把握したかのような麻雀

を打つ、その正体は衣たちにとつても依然として知れぬままだ。怜も全力で挑んでみろ、何か新たな気づきがあるやもしれぬ」

怜「千里山のエースの力見せたる！」ゴツ

衣「ふふふ」ゴゴゴ

咲「・・・」ゴゴゴ

透華「」コオオオオオ

怜「完敗やつ!! 手も足も出んてのはこのことやな。これがプロとの距離なんかな？」

竜華「あんなに息巻いとつたのにな」

怜「それは言わんで」///

咲「プロでも相手を選ばなければ、もつと近いと思いますよ」

衣「それより怜に聞きたいことがあるんだが、今日一日衣は役に立てていたか？」

怜「アドバイスたくさんもらえて嬉しかったよ。ただ一朝一夕でど

うにかなるものやなかつたし、言葉が難しくてなあ」

衣「」

怜「でも・・・最高の先生やつたよ、衣ちゃん。今までになかった考え方とか視点とか教えてもらつてホント感謝しかないわ。衣ちゃんのアドバイス絶対ものにして見せるから待つとつてな」グツ

衣「怜つ！」パア

透華「さすが我らの衣先生ですわ」

咲「今度は私も教わりたいな、衣先生」ナデナデ

衣「なーでーるなー、でも衣先生いい響きだ」ニパー

竜華「なんやつたら千里山に転校するか、衣ちゃんに教えてほしうな後輩がぎょうさんおるで」ナデナデ

怜「船Qとかよろこびそやな」

透華「何を言つてますの!?衣が転校なてするはずありませんわ」

衣「そうだぞ、龍門渕のみんなは家族だからな。でも衣先輩・・・、衣先生・・・」

透華「何を悩んでますの!？」コロモー

衣「じょ、冗談に決まっておろう、何を焦つておる」メソラシー

透華「ならこつちを向いてくださいまし。ころもー!？」

～夕食後～

咲「そういうえば怜さんと竜華さんは次はどこに行かれるんですか？  
全国巡るんですよ」

怜「そのつもりなんやけど中々予算がな。新道寺とは連絡とつて  
あつて、できれば行きたいつちゅう話はしてあるんやけど」

衣「ふーむ、よし衣に任せとおけ。お金のことは透華に相談してみ  
よう」

怜「さすがにお金まで世話になつたりはできんよ」

衣「だつたらこいういのはどうだ。衣は怜たちの学校が見てみた  
い、竜華たちの仲間と打つてみたい。だから我ら龍門渓高校との練習  
試合を受けてくれ」

竜華「その対価につちゅうことか？うちの監督なら練習試合はすぐ  
決まると思うで」

衣「なら決まりだな」

咲「透華さんは大丈夫なんですか？」

透華「もちろんですわ」

竜華「ちょっと待つて！その前に聞いておきたいんやけど、何でそ

んなにウチらを助けてくれるんや?」

怜「せやな。今日仲良くなつたとはいえ、初対面の相手にそこまでする義理ないやろ」

衣「そうだな、衣は今日ほど率直に“教えて”と頼まれたことは今までなかつたのだ。麻雀を教えるのは初めてのことでなかなかの難題だつたがとても楽しかつた。怜の麻雀を見ているとまるで自分が打つてているかのように興奮し手に汗握つていた。怜は衣に麻雀の新たな楽しみ方を教えてくれたのだ」

透華「衣、そんなこと考えてましたのね」

衣「衣はまだまだ麻雀を楽しめる、みんなと一緒に楽しめる、それが嬉しくてたまらないのだ」

咲「・・・衣ちゃん」

衣「だからそのお礼だと思つてくれ」

透華「衣もこう言つてますし、ぜひ受け取つてくださいまし」

怜「衣ちゃん・・・こんな断れるわけないやろ」

竜華「ありがとな。その代わり練習試合はウチらが無理矢理にでもねじ込んだる。ただ千里山は強いから氣いつけてな」

衣「その言葉はそのまま返すぞ。来年のインターハイは衣たちが優勝するつもりだからな」

咲 「怜さん・・・」

怜 「なんやー?」

咲 「その旅に私も連れて行つてください。お願ひします!!」

怜 「急にどないしたん? 福岡やで、そんな簡単に決めていい距離で  
もないし。いつ帰つてくるかもわからんよ。」

咲 「それでもです。お金なら自分で何とかします。お父さんも必ず  
説得しますから」

怜「理由は!?せめて理由聞かせてくれや。」

咲「私最近壁に当たつてるんです。練習でもほとんど勝てなくて、でも・・・・・強くなりたいんです。もつともっと強く、だれにも負けないくらい」

竜華「ええやん、連れて行つたら。怜やつて気に入ってるんやろ咲ちゃんのこと」

怜「そうやけど」

咲「怜さんの特訓も手伝いますから!」

怜「・・・わかった、竜華も言つてることやしな。どうせなら一緒に最強でも目指そか」

咲「はい!!ありがとうございます」

## 新道寺の巻1

怜「ようやく着いたな。」

咲「移動だけでも疲れちゃいました。」

怜「移動よりも咲ちゃん見張つとくのに疲れたわ。」

咲「ごめんなさい。」ウゥツ

怜「そんな気にせんでええよ、ただ次からは手繫がなかあかんな。」

咲「ええっ！さすがに恥ずかしいです。」

怜「次空港ではぐれたら、アナウンスしてもらうで。『長野からお越しの宮永咲ちゃん』って」

咲「やめてください!! 手つなぎますからっ。」

怜「それでええんよ。」

咲「うう」

煌「園城寺さん、お待たせしました。お迎えに上がりました。」

怜「おお花田ちゃん、待つとったよ。」

煌「久々の再会、すばらです。」

咲「花田煌さんですよね。初めまして、宮永咲です。」

煌「初めまして宮永さん、和と優希は元気にしてますか?」

咲「二人とも元気ですよ、優希ちゃんは元気が有り余つてますけど。」

煌「それはそれはすばらです。長旅お疲れでしおうしさつそくですが、我が家に向かいましよう。」

♪移動中♪

煌「お二人は何というか、不思議な組み合わせですね。それに清水谷さんも一緒に来ることになっていたと思うんですが。」

咲「私が怜さんに無理を言つて連れてきてもらつたんです。」

怜「竜華は今頃、大阪に戻つてころやろか。ここに来る前に長野にも行つたんやけど・・・」

♪龍門渓邸♪

怜「咲ちゃんが本気なら一緒に行つてくれるんなら頼みたいことがあるんやけどええか?」

竜華「咲ちゃん怜と一緒に行くことは問題ないよ、なあ竜華?」

咲「もちろん何でもしますよ。」

竜華「やつぱりええ子やなあ。そんな咲ちゃんやから頼む。怜が無理しないよう見張つてほしいんや。」

咲「ええっ、竜華さんは一緒に来ないんですか?」

怜「そうや竜華!! 急にどうしたんや?」

竜華「今日怜は必死で特訓しどつたけど、ウチはなんも力になれてへん。」

怜「そんなことないで。竜華が一緒に来てくれるだけでウチは…」  
竜華「それじやダメや! ウチが納得できへん。ウチも怜の力になりたい。」

怜「竜華…」

竜華「能力つてのもよう分らんしな。だから一旦大阪に戻るわ。必ずいい報告したるから待つってや。」

怜「ほんまにええんか?」

竜華「いいから行つてき。信用しとるよ。」

怜「分かつた。なら咲ちゃんと一緒に行つてくるわ。絶対成長して帰るから心配せんと待つとつてな。」

咲「私がきちんと見てますから。」

竜華「二人ともありがとな。」

♪回想終了♪

煌「青春ですね。すばらです。」

怜「まさかウチが咲ちゃんを見張つとくことになるとは思わんかつ

たけどな。」

咲「もういいじゃないですか」////////

煌「？ さあ着きましたよ、ここが我が家です。両親は旅行中ので気にせずつろいでくださいね。」

咲・怜「お邪魔します。」

煌「部長と姫子は明日の朝から来ますから、今日は英気を養つて明日に備えましょう。」

「夕食後」

怜「ご馳走さん、料理美味しかったで。二人とも料理上手なんやな。」

煌「お粗末様です。」

怜「咲ちゃんが上手くてびっくりしたわ。」

咲「どういう意味ですか。私はお父さんと二人暮らしなんで家事は大体できますよ。」

煌「宮永さんのお姉さんにはインハイでお世話になりましたねえ。」

怜「確かに、あれは強烈やつたな。」

咲「あはは…、花田さん私のことは咲でいいですよ、宮永だと紛らわしいですし。」

煌「それでは、咲ちゃんと。皿洗いはやつておきますからお二人はくつろいでテレビでも見ていてください。」

怜「すまんなあ。何から何まで。」

煌「いいんですよ、お二人のお陰で楽しいクリスマスになりそうです。」

怜「さつきまで今日がイブなの忘れとつたで。バタバタしとつたらなあ。」

咲「確かに変わったクリスマスイブでしたね。」

怜「去年まではだいたい竜華、セーラたちと一緒にやつたからなあ。プレゼントも今年は用意してへんな。」

煌「明日何か買いに行きましょうか?」

怜「時間あつたらそれもええな。咲ちゃんはどうや?」

咲「私はちゃんとプレゼント用意してきましたよ。というわけで怜さんにプレゼントです。」

怜「ウチになんか?」

煌「ちょっと待ってください!!」

怜「急にどうしたん?」ビックリ

煌「明日、部長と姫子も入れて5人でパーティーしようと思つてた

んですよ。なのでプレゼントはその時までお預けでお願いしますね。」

咲「それならしようがないですね、怜さんは用意してなかつたみたいでし。」

怜「明日までに何か考えるから堪忍な。」

ピピー

煌「お風呂できたみたいですね。先入っちゃつてください。」

怜「!!せや、咲ちゃん一緒に風呂入ろか。体洗つたげるで。」 ドヤ

咲「プレゼントのつもりですか!?」

怜「なかなかええ案やろ?」

咲「ええくないです!」

怜「ええくないてなんやねん。軽い冗談やから、いつでも入つてきてええからな。」

咲「入りません!」

怜「咲ちゃんはからかうと楽しいな。」 ハツハツ

咲「・・・・・怜さん明日プレゼント期待してますね。」 ニコツ

怜「

煌「仲良きことはすばらですね。」

（就寝前）

咲「まだ起きてますか？」

怜「起きててるで。」

咲「怜さん今回の旅つてプロになるためですよね？」

怜「気づいとったんか。咲ちゃんにはかなわんな。」

咲「別に気づいていたわけでは…ただ他に理由が思いつかなかつただけです。3年生のこの時期に急に強くなりたいわけが。」

怜「その通りや、他言無用でお願いな。」

咲「スカウトとの約束ですか？」

怜「そうや。ウチ・竜華・セーラ3人そろつてスカウトされたんやけど、ウチだけ条件付きやつたんよ。」

咲「プロのレベルで打つには2巡目以上の力が必要つてことですか。」

怜「それもあるし、プロは年間に膨大な数の対局をこなす。だからこそ体力・精神力が必要になつてくる。高校生の比やないつて話や。」

咲「1巡目だけなら今の体力でも大丈夫なんぢやないですか？」

怜「一応な。それでも1年フルでつてなつたらやつぱり不安は残るし、病気が悪化するかもわからへん。」

咲「それでも十分活躍できると思います。」

怜「ありがとな。そやけど選手が倒れたら一大事やからな、場合によつてはチームが責任を問われたりもする。ようするにリスクが大きいんよ、ウチは。」

咲「そんなリスクなんて・・・」

怜「インハイで倒れてもうたのが印象悪かつたみたいや。」

咲「あれはチームのために頑張つたんじやないですか!!」

怜「そういうつてもらえるとうれしいわ。」

咲「・・・でも諦めてないんですよ。」

怜「リスクが大きくて、そのリスクに見合うだけのリターンがあればええ。」

咲「それで能力の向上なんですね。」

怜「せや。最初に言つた条件つてのは試験に合格すること。スカウトが言うには宮永照を抑えるだけの力があれば合格できるらしいで。」

咲「お姉ちゃんはプロでも抑えられないって言われてるんですよ」

怜「インハイでも散々無理して、三人がかりでやつとやつたからな」

咲「だつたら…」

怜「ようはトッププロ並みの力を示せつてことやとウチは思うと  
る。」

咲「そんなの厳すぎます。それに怜さんなら大学に行つて、着実  
にレベルアップしてからでもプロになれると思います。」

怜「ウチは今プロになりたいんよ。せつかく竜華たちと同じ舞台で  
打てるようになつたんや、もう離れたくない。」

咲「今無理しなくてもたつた4年待つだけですよ。竜華さんもセー  
ラさんも待つてくれます。」

怜「咲ちゃんは今回の旅反対やつたんか？」

咲「旅には賛成です。能力を知ることは怜さんには必要だと思うか  
ら。でも急激な特訓で2巡先が見えるようになつたとしても、怜さん  
の雀士としての命を縮めるだけな気がして」

怜「ええとこつくな、ウチもそう思うよ。」

咲「自分でわかってるなら、どうしてですか？」

怜「ウチは去年生死の境をさまよつて、気づいたら1巡先が見える  
ようになつとつた。一瞬で手に入れた力や一瞬で無くなつても不思  
議やない。なら4年も待つてたらこの能力消えてまうかもわから  
ん。」

咲「そんな!?」

怜「ウチにとつては竜華やセーラの隣にいる今が夢がかなつたみたいなんや。せつかくなつた夢を簡単に手放せるわけないやろ。」

咲「…………」

怜「それに今が夢なら奇跡だつて起きてもおかしないはずや。」

咲「夢ですか。」

怜「さすがに臭かつたな、忘れてや。」

咲「いえ好きです、そういうの。それに私も知りたいです、奇跡が本当に起こせるかどうか。」

怜「なんや付き合つてくれるんか?分の悪い賭けやで?」

咲「嶺上開花の起きる確率知つてますか?私には十分勝算があるかけです。」

怜「せやつたな。心強い味方が増えて嬉しいわ。あと能力が消えるかもっていう話は竜華にも無しや。なんも確証のない話やしいらん心配をかけたくない。」

咲「付き合いの短い私に良く話しましたね。」

怜「一人で抱えきれなくなつたところにたまたま咲ちゃんがいたんですよ。このことは一人の秘密やで。」

咲「わかりました。二人の秘密です。」フフ

怜「次は咲ちゃんの話が聞きたいわ、この旅についてきたわ  
け。・・、いややつぱりまた今度にしよか。今日は疲れたわ。」

咲「はい、おやすみなさい怜さん。（私の旅・・・）」

## 新道寺の巻2

トントントントン

怜「花田ちゃん、おはよう。」

煌「あら怜さん、おはようございます。もう少しでできますから、顔洗っちゃってください。」

怜「……朝からありがとな。ほな行つてくるわ。」

煌「そしたら咲さんも起こして来てもらつていいですか？」

怜「了解や。」

煌「ふんふふん♪」

（寝室）

怜「咲一、起きろー朝やで。」

咲「うー・・・」

怜「意外と朝弱いんやな。」

怜「ほら花田ちゃんが美味しい朝ごはん作つて待つてるで、起きや。」

咲「うん・・・あれ怜さん?」ウトウト

怜「おはようさん、怜さんやで。」

咲「・・・ふわつ、お…おはよう(?)ぞいます?」

怜「寝ぼけてないで朝ごはんや、顔洗つときいや。」

咲「はい。先行つててください。」

怜「洗面所わかる、大丈夫迷わんか?」

咲「家の中で迷いませんよ!」

リビング

咲「お待たせしました。すみません、朝も手伝おうと思つてたんですけど:」

煌「いいですよ、それより昨夜はお楽しみでしたね。」 イツテミタ  
カツタ

咲「?」

怜「ブフツ!? 急に何言うんや。う、ウチはな、何にもやましいことあらへんよ。」

咲「怜さん落ち着いてください。」

煌「いえ、昨晚は楽しそうにおしゃべりする声が聞こえてるものですから。それとも何かあつたんですか?」

咲「おかげさまでぐつすり眠れましたよ。」

怜「そ、そやな。楽しくおしゃべりしただけやで。」

煌「慌ててるとあらぬ疑いをかけられちやいますよ。」

咲「・・・ほんとに何もしてませんよね?」

怜「メソラシー

咲「何したんですか?」ニコツ

煌「早めにしやべつちやつたほうがすばらじやないですか、咲さんも怒りますよ。」

怜「可愛かつたからつい・・・」スマホ

煌「おおっ、これは。」

咲「消してください!!人の寝顔を何だと思ってるんですか。」

怜「それは尊い何かやろ。」シレツ

煌「確かに、私にもぜひ送つてください。」

咲「だーめ、ダメです!ダメですかね。怜さんはすぐ消してください。」

怜「まあまあ、いいやろもう誰にも送らんから。」

咲「ダメです、ほら消してください。」

怜「わかったって。ほらこれでええやろ。」

咲「もうやめてくださいね。」

煌「（絶対他にもとつてますよね）」

怜「（照に送つて自慢したのは黙つとこか）」

咲「早く食べましょう。」

（朝食後）

煌「部長たちは近くの雀荘で待ち合わせてるので準備できたら行きますよ。」

咲「インハイの映像見ましたけど、お二人ともすごく強かつたです。」

怜「特に白水理は強かつたなあ。準決勝は見てて怖かつたわ。」

煌「味方でしたらあれ以上頼もしい方もなかなかいないと思いますよ。」

咲「大将の鶴田さんもすごかったです。」

怜「三人の和了りがリンクしてるんやろ、初めて聞いたときはさすがに嘘かと思つたわ。」

煌「三人はリザベーションつて呼んでましたね。」

咲「プロでも破れないらしいですね。」

煌「確かにあれが破られるのは見たことがないですね。」

怜「二人で使う能力ってどういうもんなんやろな。ウチと竜華とも違うやろし。」

煌「私からしてみれば、怜さんと咲さんも十二分にすごい能力だと思うのですがね。」

咲「昔から使えたんですかね、それとも練習して習得したんですかね？」

煌「その辺の話は私も詳しくは知りませんね。ぜひ聞いてみてください。」

怜「白水にとつてはリスクしかない能力やと思うんやけど、それでもあの強さは羨ましい限りや。」

煌「あまり言われませんが、姫子もそうとう強いですよ。」

咲「早く打つてみたです。」

（雀荘）

煌「部長、姫子お待たせしました。」

哩「待つとつたよ。白水哩や、今日はよろしく。」

姫子「鶴田姫子です。今日はよろしくお願ひします。」

咲「宮永咲です。」

怜「園城寺怜です。よろしくお願ひします。」

煌「それでは私は夜の準備がありますので、終わつたころに連絡をくださいね。」

姫子「準備全部任せてしまつて、申し訳なか。」

煌「いいつてことですよ、それより怜さんと咲さんにしつかり教えてあげてくださいね。それでは。」

哩「さつそくやけど、園城寺と宮永は私たちの能力は知つとお？」

咲「花田さんからリザベーシヨンだと、能力も大体は知つてます。」

怜「二人で一つの能力つて話やな。」

哩「そうやね、ただ私は氣づいたらリザベーシヨンができるようになつとつたけん、能力の使い方ば教えるんは難しか。」

怜「やつぱりそうなんやね。」

姫子「やつぱりですか？」

怜「今のところウチが聞いた人はほとんどそうやつたからな。」

咲「私も聞かれて初めて、意識して使つてなかつたなと思いまして。」

哩「そうやけん私たちのアドバイスは能力を使う上での工夫にしよう

思つてゐる。」

姫子「能力の使い方言うても抽象的な話しかできそうにないけれどね。」

哩「まず単純な方法やが、いつリザベーションを発動したかをわからなくするようにしちよる。」

怜「あの牌ふせるやつやな？」

哩「そうだ。それでも見る奴が見れば、ばれてるとは思うがな。」

怜「フナQもわかつてゐふうやつたな、そりいえば。」

哩「あとはリザベーションした局としてない局の打ち方をできるだけ変えんように意識しとる。」

咲「翻数が決まつてるとある程度は決め打ちになりますよね。」

哩「ああ。やけんできるだけになつと。隠すことに氣を取られて和了りを逃したり、振り込んでしまつたら本末転倒たい。」

怜「能力はあくまで補助つてことやろか？」

哩「いやそりやなか。リザベーションは私が強くないと意味のなんか能力やけ、そがん甘か手ば打つとするようじやダメばい。私がその程度ならリザベーション使わんと二人で打つたほうが強か。」

怜「頭の痛い話やね。」

咲「リザベーションがあつたから白水さんは強くなつたんですか

ね。」

哩「リザベーションは姫子の局ばもらつとるようなものたい、私は二人分強くなかダメやけん。」

姫子「部長…そがんこと思つとつてくれたんですね。」 //

哩「なんか恥ずかしかね。」

怜「やつぱり急がば回れつてことなんやろか?」

咲「怜さん…」

哩「ただ姫子と一緒に打つときはリザベーションば一番に考えとる。」

姫子「リスクも大きかですけどリターンが大きいですから。」

哩「リスクが大きいけん、使う局面や翻数は事前に良く考えとる。千里山と戦つた準決勝は点差が大きかつたけん、回数も多く手も大きくなつた。」

怜「あの時はものすごかつたな。」

姫子「逆に予選なんかで勝つてゐる時は、小さい手を多めにしたりしてますよね。」

哩「より確実性を高めるためやね。」

怜「なるほどな、いろいろ考えてるんやね。」

哩「あとは対局相手によつても変えとる。早い手が得意か、攻撃重視か守備重視かなんかは意識してる。」

咲「なるほど、臨機応変にですね。」

哩「リザベーションに関してはとりあえずはこがんとこか。」

姫子「園城寺さんに前から確認したかつたんですけど、本当に1巡先が見えるんですか？」

怜「1巡先なら常に見えとるよ。」

哩「世の中には不思議な人もおるもんやね。」

咲「白水さんたちも大して変わらないと思いますよ。」

姫子「宮永さんもね。」

哩「でも1巡先が見えるならもつと鳴きの有効活用はできんと？」

怜「鳴き？立直一発が武器になるし面前を意識して打つとつたけど。」

哩「極端な話やけど、1巡先が見えんくとも、立直一発の手は立直して自摸れる。捨てる牌を一度も間違えなければ手の進みも大きくは変わらんと思う。」

怜「今のウチじや、正直厳しいんよな。」

哩「やけん1巡先が見える力の真価は他家の捨て牌がわかることにあると思う、他家の捨て牌を利用するとなると一番はやっぱり“鳴き”

“ ばい。 ”

咲 「確かに一理ありますね。」

哩 「ばつてん自分で使えるわけじやなかけん、実際とは違うかも知れんが参考になるんじやなか？」

怜 「確かに鳴きを使つてはいたけど、面前を中心と考えとつた。思い出してみれば照に一矢報いた局もウチは鳴いとつたな。」

哩 「参考になつたならよかと、その代わり今日は全力で姫子ば相手を頼むけん、宮永もよろしく。」

姫子 「私も来年はリザベーションに頼れませんから、お二人からいろいろ学ばせていただきます。」

怜 「ウチは鳴きを意識やな。」

咲 「(鳴きを意識して……)」

哩 「よしじやあさつそく打つぞ！」

「対局後」

姫子 「こがん勝てないのは久しぶりや……」

咲 「そんなことないですよ、本当につけかつたです。」

姫子「咲ちゃんは優しいなー。長野はみんなそうなんか?」

咲「花田さんは特別ですよ、あんな人探したつて見つかりません。」

怜「新道寺は来年も恐そうやな。」

哩「来年こそは日本一たい。千里山はどうたい?」

怜「まあ予選は大丈夫やろ、憩ちゃんがちよつと怖いけどな。全国は長野が恐いわ、龍門渕と清澄どつちが来ても。」

咲「風越や敦賀かもしれませんよ?」

姫子「咲ちゃんや天江衣が負けるとは思えんけど長野も大変なんやね。」

哩「宮永は麻雀が上手くなってるな。」

咲「そうですかね?」

哩「インハイで見た時よりは確実にうまくなつたと思うよ。」

咲「インハイ終わつてからは和ちゃんとか部長の打ち方とかを教えてもらつてるんです。」

哩「ばつてん言わせてもらうが、怖くは無くなつたと思う。インハイの時の宮永は何をやるか分らん不気味さがあつた。」

咲「つまり弱くなつてることですか?」

哩「そうじやなか。長いスパン打てば今のはうが成績ば残すと思う

よ。」

姫子「インハイは一発勝負やけん、『何をするか分らん』ていうのはアドバンテージになるよ。」

咲「確かに自分でもうまくなつてる自覚はあつたんです。ネット雀でも前より勝てるようになりましたし。でも・・・」

怜「実際に打つとうまくいかんのやね。」

咲「そなんです。怜さんはどう思いますか？」

怜「スランプってやつやろか。技術的にうまくなつとるなら精神的な不調とか？」

咲「特には思い当たらないですけど。」

怜「・・・」

姫子「今日も別に調子悪そうには感じなかつたんですけどね。」

咲「うーん・・・」

哩「さあそろそろいかんと花田が待ちくたびれてるとよ。」

怜「そやね。咲ちゃんの件はウチも考えてみるし、とりあえず帰ろか。」

（花田家）

哩「お邪魔します。」

煌「お疲れ様です。さあさあ上がつてください。」

姫子「すごい料理やね、花田が作つたん？」

煌「だいたいはデパートで買つてきましたよ。」

怜「何から何までありがとなあ。」

煌「それよりも特訓でおつかれでしようし、早く食べましょう。」

咲「すごい、これつてシャンパンですか？」

怜「これはシャンメリーやな。なんやお酒飲んでみたいんか？」

姫子「意外とませてるんやな。」

哩「宮永、お酒はダメぞ！怜もしつかり教育せんか。」

煌「部長、そんな本気にしなくても大丈夫ですよ。」

怜「ほら咲ちゃんも面食らつてないで。」

咲「」

姫子「シャンメリーオ開けますよー。」ポンッ

咲「初めて飲みましたけど美味しいですね。」

姫子「こっちのチキンも美味しいよ。」

怜「このパスタめっちゃ上手いで。」

哩「確かに。花田こがんどうやつて作つたと?」

煌「それはですね・・・」

姫子「これ手作りなんか。花田にはかなわんなあ。」

怜「なあ花田ちゃん、千里山にこんか?今なら天江衣も付いてくるかもしけんで。」

姫子「何言い出すんですか!?ばつてん花田が行くわけなか。」

咲「花田さん、清澄もまつてます。古巣に帰るつもりでぜひ。」グツ

哩「宮永までっ!私が全力で阻止しちゃる!」

煌「みなさん、ありがとうございます。全力で準備したかいがありました。すばらです。」

怜「話変えてダメやで。さあ答えてもらうで、千里山か新道寺か清澄か。」

煌「そんな?!新道寺を辞めることなんてできません、しかし誘いを無碍にするのも。ムムム。」

哩「そがんは新道寺一択じやなか!?」

怜「満足や、龍門渕の料理もすぐかつたけど花田ちゃんの料理も負けてへんな。」

咲「美味しかったです、あとでお料理教えてもらいたいです。」

煌「ハイ、ケーキ持つてきましたよー。お皿持つてきますんで部長切り分けお願いしますね。」

哩「・・・・・」

咲「??」

姫子「部長どがんしたとですか？」

哩「いや、ぴったり5等分にするにはどう切ればいいかと思うて。」

怜「何もピッタリじやなくても、普通に8等分くらいでええんやない?」

哩「え…あつ。そ、そうやな!？」

姫子「部長・・・」

煌「どうしました?早く切りましょう。」サラ、デス

咲「このケーキは手作りですか？」

煌「ええ、頑張りました。今回はこのケーキとパスタを気合い入れて作りました。」

怜「さすがの女子力やね。」

煌「そこだけは部長にも負けませんよ。」

哩「なんも言いかえせん。」

咲「お姉ちゃんや怜さん、白水さん3年生つてみんなそうなのかな？でも部長は一人暮らしだし・・・」ブツブツ

怜「なに一人でぶつぶつ言つてるんや。ウチが料理できないなんて言つたことあつたか？」

咲「えつ怜さんできるんですか！？」

怜「まあできないんやけど。その評価は心外や。」

哩「私も園城寺にはさすがに負けんと思つとる。」

怜「ケーキ切り分けるくらいはウチでもできるで？」

哩「あれはただ勘違しどうただけやけん。私は寮暮らしで、掃除なんかもじぶんでやつとる。」ホリカエスナ

怜「ウチかて、そんくらいやるわ。」

煌「部長も園城寺さんも他人に誇るにはもう少し女子力の高いこと  
を…」スバラクナイ

姫子「それに部長は帰省した時、掃除もなんもせんかつたって言つ  
てましたよね…」

哩「うぐつ!?

怜「やつぱりウチのが上やな。」ドヤッ

咲「怜さんも変わりませんからその顔やめてください。」

怜・哩「

煌「さ、さあ次はプレゼント交換行きましょうか?」

姫子「私張り切つて選びましたよ。」

咲「みなさんが何を選んだか楽しみです。」

煌「くじを用意したのでこれで誰が誰のをもらうか決めましょう。  
部長良いですか?」

哩「ああ、気を取り直してはじめよか。」

くじ引き後

煌「では私がら発表しますね。・・・これはマフラーですね。すば  
らです。」

哩「私が選んだやつやね。ありきたりなものだがなかなか良いデザインやと思つてな。」

煌「ありがとうございます。絶対大切に使います。」

哩「まあ普通に使つてくれ。私のもらつたこれは・・・手袋か。」

姫子「私ですね。といつても一緒に選んだから知つてますよね。」

哩「それでも嬉しかよ。大切に使うけんね。」

姫子「私のは・・・イヤーカフです。」

煌「それは私ですね。姫子ならきっと似合います。」

姫子「ちょうど欲しかったんよ。ありがとうございます。」

煌「しかし偶然とはいえ、新道寺で交換してしまいましたね。」

咲「しかたないですよ。ということはこれは怜さんのプレゼントですよね？」

怜「せやな。これは咲ちゃんのやね、ウチから開けてもええか？」

咲「どうぞ。」

怜「どれどれ・・・これは本？」

咲「すみません。買いに行く時間が無かつたので、私が読んだものですが、一番のお気に入りの小説です。」

怜「いや、嬉しいわ。咲ちゃんのお気に入りどんな話なんやろ、早く読みたいわ。」

咲「・・・やっぱり別のにしません？」

怜「いやや。ええやろお気に入りの小説、なんならもう一冊買ってプレゼントしよか？」

咲「そうじやないです。本当に一番のお気に入りなので、自分の内面を見られるような恥ずかしさが。」

煌「なんとなくですが、私もわかります。本の好みってその人の趣味嗜好がダイレクトに出るじゃないですか、本が好きな人ならなおさらです。」

怜「なるほど。それをウチにプレゼントしてくれたと。これは返すわけにはいかんなあ」ニヤニヤ

咲「もう、その顔やめてください!!」

姫子「部長、一番好きな本つて何ですか？」

哩「姫子こそどがん本が好きや？」

煌「仲良きことはすばらですが、後で二人でお願いしますね。今は怜さんのプレゼントが気になります。」

咲「怜さんのプレゼントは・・・」

怜「ちょっと待ったー!!」

咲「なんですか急に!?」

怜「そのプレゼントやけど無しにしてええか?」

咲「どういふことですか?」

怜「それ今日の帰りに適当に選んだ奴なんよ、だからいつたん預かつて後日ちゃんとしたの渡したいんや。」

咲「なるほど、わかりました。」

怜「そうか、なら……」

咲「それまでこのブレスレットは預かつておきますね。怜さん忘れそうですし。」ウデニハメ

怜「忘れる言るのは心外やけど、まあええよ。」

煌「これでプレゼント交換も終わりですね。」

哩「実はあと一つあるんだが、園城寺に宮永、永水に行つてみる気はないか?」

怜「なんの話や?」

哩「今朝たまたま永水と連絡を取る機会があつてな、二人の話をしきみたらゼひうちにも来てほしいと言つてきてな。訪ねていけば明日からでも大丈夫やつて。」

咲「永水ですか。鹿児島ですか?」

哩「ああ。高校雀界では一番の異能集団やけん。能力を鍛えたいなら最高の環境だと思うがどがんする？」

怜「ぜひお願ひします。願つてもない展開やし、神様が応援してくれる氣さえしてくるわ。」

姫子「永水がからむと本当にそう思えますね。」

哩「わかった。連絡しどくけん、明日電車で向かってな。」

怜「了解や。でも本当に新道寺に来て良かったで、最高のクリスマスやつた。」

咲「私もこんなに楽しいクリスマスは久しぶりです。」

煌「すばらなクリスマスでした。来年もやりたいですね。」

姫子「せっかくやけん写真撮りましよう、写真!!」

怜「せやな。そいえば、あれやつてなかつたやんな?」

姫子「普通はクリスマスイブにやるんじゃないですかね?」

咲「楽しければいいんじやないですか?」

哩「そやね。最後に言うのも変やけど

煌「写真準備できました。」

怜「せーの・・・」

「「「「メリークリスマス!!」」」

# 氷水の巻1

「移動中」

怜 「なあ咲ちゃん」

咲 「・・・」

怜 「おーい」 フリフリ

咲 「・・・」

怜 「!!」 ヒラメイタ

怜 「ふつ！」 ミミニ

咲 「ひやつ！何するんですかっ？」 //

怜 「二人でいるのに、ほつとくのが悪いで。」

咲 「ちょっとと考え事してただけです。」

怜 「寂しいと死んでしまうで？」

咲 「どこのウサギですか。でも迷信らしいですよ、それ。」

怜 「ウチほつといて何考えてたん？」

咲 「根に持つてます？ちょっと怜さんの対局を思い返していまして。」

怜 「なかなかすぐに成果はでえへんな。」

咲「衣ちゃんや白水さんのアドバイスはどうですか?」

怜「選んだ一人の未来を見るのは無理そやわ、どうも上手くいかん。」

咲「衣ちゃんの言つてたやつですね。」

怜「いい案やと思つてたんやけどな」

怜「怜さんの能力とは合わないつてことですかね?」

怜「体力節約しながら未来見れるかと思つたんやけど…」

咲「なかなか上手くいきませんね」

怜「もともと簡単にいくとは思つてへんし、まあこれからやな。」

咲「そうですね。気を落とさず行きましょ」

怜「そやな。そろそろお弁当たべよか、」

咲「私駅弁つて初めてです。」イタダキマス

怜「旅先でのご飯はうまいで」

咲「確かにこのお魚すごくおいしい」モキュモキュ

怜「ウチはこの玉子焼きがお気に入りやな」

咲「やっぱり手作りとは違いますね」

怜「そか？咲ちゃんの手作りも同じくらい美味しかったで」

咲「お世辞はいいですよ」

怜「お世辞じやあらへんよ、花田ちゃん家で食べた咲ちゃんの料理最高やつたで」

咲「ありがとうございます。」フフツ

怜「『咲ちゃん手作り弁当』で売り出せば大儲け間違いナシやな」

咲「勝手に私をお金儲けに使わないでください」

怜「『宮永家の思い出の弁当』の方がええかな？」

咲「そういうことじやないです!!」

怜「まあまあいいやん、美味しいのは本当やし」

咲「もうつ、それよりこれから行く永水のことです。」

怜「オカルトの総本山つてイメージやな、今回の旅の目的に相応しいわ」

咲「そうですね、インハイの時も恐かつたです」

怜「永水はいろいろ大迫力やからなあ」

咲「神様すごいです・・・」

怜「石戸さんか神代ちゃん、膝枕してくれんやろか?」

咲「またですか…昨日白水さんにも断られてたじやないですか」

怜「白水さんの太ももはなかなかに魅力的やつたな」

咲「あの時の鶴田さん目が恐かつたです」

怜「あの時は引き下がつたけど諦めたらアカン!夢は叶えるもんや!  
！」

咲「何を力説してるんですか」ハア

怜「ウチは永水で膝枕されたる!!」

咲「やめてください恥ずかしいです」

怜「なんなら咲ちゃんでもええんやで?」

咲「そのうちです、そのうち」

怜「やっぱり咲ちゃんは優しいな」

咲「もう・・・」

「到着」

霞「お待ちしておりました。宿泊の準備もできていますよ。」

怜「どうもおおきに。園城寺怜です、今日からよろしゅうお願いします。」

咲「お久しぶりです、石戸さん。」

霞「お久しぶりね。今日はゆっくりしてね、お風呂もご飯もすぐ用意できるけど、どうします?」

怜「なんやお母さんみたいやな」

霞「・・・・・」ピクツ

怜「なあ石戸さんお願ひがあるんやけど・・・」

咲「怜さん自嘲してください」

怜「わかつたから睨まんといて」

咲「すみません石戸さん、先にお風呂いただいてもいいですか?少し歩いて汗かいちゃつて」

霞「・・・わかりました」ニコツ

怜「??」

霞「それならみんなで一緒に入りましょうか」

「入浴中」

咲「アゼン

初美「咲ちゃんどうしたんですかー?」

怜「あまりの格差社会に絶望しとるんや、どこがとは言わんが」

初美「気にしたら負けですよー、あんなの」チツ

霞「初美ちゃん何か言つたかしら?」

初美「ただ山が減らないかなと思つただけですよー」

小蒔「宮永さん隣いいですか?」

咲「神代さん、直接お話するのは初めてですね」

小蒔「インターハイの準々決勝大将戦すごくかつこよかつたです。あの状態の霞ちゃんに勝つなんてすごいです。」

咲「嬉しいです。でも私は永水を倒したんですよ、申し訳ないです。」

小蒔「もう気にしてません。もちろん当時は悔しかつたんですけど今は『宮永さんすごい』という気持ちのほうが大きいです。」

咲「私が『すごい』ですか？」

小蒔「はい。すごいしお強いです」ニコ

咲「一番大事な試合で負けたのにですか？」

小蒔「はい、もちろんです。優勝を逃したことを気にしていらっしゃるんですか？」

咲「本当に大事な試合だつたんです。部長の最後の試合で・・・和ちゃんの転校もかかって・・・でも私が勝てなかつたから」

小蒔「それは宮永さんの責任ではないと思います。誰かが背負うと いうなら清澄高校全員で背負うべきです」

咲「・・・」

小蒔「そもそもあの決勝で白糸台高校が勝ちましたが、それはあの日白糸台が他の高校より少しだけ運がよかつたから。私はそう思います。」ニコツ

小蒔「他のどの高校も、劣っているなんてことは決してありません」

咲「…………」

小蒔「あまり暗い顔ばかりしてると霞ちゃんに怒られますよ。霞ちゃんは怒ると恐いです」

小蒔「園城寺さんもきっと心配しますよ」

咲「……そうですね、ありがとうございました。少し心が軽くなつた気がします」ニコ

小蒔「…………はい」

咲「そういうえば私のことも知ってくれていたんですね」

小蒔「インターハイがおわつてから会つてみたいと思つてました」

咲「怜さんにも言されました。決勝の時のお姉ちゃんとのやりとりを見ててくれた人が多いみたいで…」

小蒔「そうです私も見つめました。」

咲「なんだか恥ずかしいですね」

小蒔「それで会つてみたくて新道寺にいると聞いて霞ちゃんにお願いして連絡を取つてもらつたんです。」

咲「え!？」

小蒔「お誘いを受けてくれてありがとうございます。」

咲「私たちが新道寺にいるつて誰から聞いたんですか？」

小蒔「春ちゃんが教えてくれました」

春「久が教えてくれた」

咲「わっ！」ビックリ

春「久にメールで頼まれた：”できたら練習を見てあげて”つて

咲「部長にはお世話になりっぱなしです」ハサマレタ

春「あと”迷子にならないように見張つて”つて”

咲「一言余計です！」ウツ

春「同級生だし久の頼みだから見ててあげる」

咲「えっ!? 同級生だつたんですか?」

春「そう…」

小蒔「同級生うらやましいです」

咲「この格差は一体…」グヌヌ

巴「姫様楽しそうですね」

霞「前から宮永のこと気にしていたものね」

初美「まるで姉妹みたいですよー」

怜「咲ちゃんはいろんな人に好かれとるな、羨ましいわ」

巴「園城寺さんも人気ありますけどね」

怜「そんなことあらへんよ」

初美「謙遜ですか？」

霞「今回の合同練習も小蒔ちゃんのお願いとはいえ、園城寺さんに会つてみたかったのも本音よ」

初美「準決勝の対局はお見事でしたよ」

巴「その分心配にもなりましたけど」

怜「今は大丈夫やからそんな心配せんといてな」

怜「それにしても何食べたらそうなるん?」ジー

霞「ええっ」

初美「霞ちゃんに聞いても無駄ですよー。ほぼ同じもの食べてると  
がわかりませんから」

怜「うーん……ミクラベ

怜「食べ物やなかつたら遺伝か!?」

巴「霞ちゃんと姫様見ると遺伝はありますね」

初美「それじゃどうしようもないですよー」

霞「あはは・・・」ニガワライ

（食後）

怜「最近美味しいもんばっかりで家帰れんくなるな」マンゾク

霞「ふふつ、ありがとうね」

巴「特訓は明日からですね」

初美「私も一緒に打ちたかったのですー」

巴「じやんけんに負けたんだからしようがないよ」ヨシヨシ

怜「明日は一緒じゃないんか？」

巴「私たちは神社の方のお手伝いに行つてきます」

咲「忙しい時期にお邪魔してしまってすみません」

霞「気にしなくていいわ、小蒔ちゃんも喜んでるようだし」「

怜「それにしても永水の練習がどううなつてるか楽しみやわ。」

霞「その練習のことなんですが…園城寺さんは能力を鍛えにきた  
ということでいいんですよ」

怜「そやね、永水と一緒に練習なら能力のヒントはたくさん得られ  
そうや」

初美「それなんですがー、私たちが普段している修行してみません  
かー?」

咲「修行ですか?」

巴「巫女としての修行です。修行といつても体力的につらいもので  
はないので安心してください」

霞「私たちはもともと巫女の力を使う修行の一環として麻雀を始め  
ました。私たちが麻雀で使ってる力は本来巫女としての力なんで  
す。」

咲「それで巫女としての修行ですか」

霞「ええ、直接麻雀を教えるよりは貢献できるかと。それに時間は  
ありますから、お二人さへよろしければ何日いてくださいっても大丈夫  
ですよ」

怜「あの『神様降ろす』いう噂は巫女の力やつたってことか?」

巴「一応はそうですね」

怜「想像以上にオカルトやな。」

咲「未来見える人も十二分にオカルトですよ」

巴「修行といつてもあまり難しく考えないで大丈夫ですよ。昼過ぎくらいまで修行をして、それからは普通に麻雀を打つのはどうですか？」

咲「私は良いと思います。新しい発見がありそうです」

怜「そうやね、よしやるからには全力でやるで！」

咲「あまり無理しないでくださいね」

初美「やつたー。麻雀向きの力を持つた人と一緒にやつてみたかったんですよー。仕事早く終わらせますから待つてくださいね」

怜「もちろん、薄墨さんの能力も見たいしな」

咲「巫女の力って私たちの能力とは違うものなんですか？」

霞「そんへんのことは私たちもあまり詳しくないの。ごめんなさいね」

巴「ただ巫女の力を麻雀という狭い範囲に集中させるのはとても難しいんです。だからこそ麻雀が修行になるんですけど」

初美「麻雀に馴染む力の人を相手にするのは難しいです」

霞「おそらくですが園城寺さんの未来視と同じような感じだと思います」

ますよ」

怜「ウチと同じ?」

咲「そなんですか、怜さん?」

怜「うーん……どうやろ」クビカシゲ

初美「でもでも最近は手段と目的が分からなくなつてきてますけどね」

霞「修行のために始めた麻雀でしたけど今ではみんな麻雀が大好きですから」

巴「姫様は特にそうですね。」

咲「そいえば神代さんはどうしたんですか?」

初美「隣の部屋で寝てますよー、そろそろ起きるころじゃないです  
かー」

霞「噂をすればね」アラマア

春「姫様…起きた」

小蒔「おはようございます」

怜「おはようさん」

咲「あれそれは…」

小蒔「これですか、トランプです」

怜「そやなくて、もう配り終わつてやる氣まんまんやん」

小蒔「ババ抜きしましよう」ニコ一

怜「おおう、眩しい。これは断れん」

咲「断つたら罪悪感に押しつぶされそうですね」

小蒔「もう準備は万端です」

春「私が配った…」

霞「それじやあやりましょうか」

怜「ウチはババ抜き強いでー」フフン

初美「私だつて負けませんよー」

怜「なら負けたら勝つた人の言うこと一つ聞くつてのはどや?」

巴「え!?

初美「受けて立ちます」

春「おもしろそう」

巴「春ちゃんまで」

小蒔「何をお願いしたらいいんでしょうか?」

霞 「あらあら」

咲 「ババ抜きは私強いですよ」

怜 「随分自身あるようやな」

咲 「怜さんにはまけません」

小蒔 「早くやりましょー！」ワクワク

怜 「咲ちゃん強すぎや、もうババ抜き禁止!!」

咲 「ふふつ」ドヤ

## 氷水の巻2

怜「よーし修行はじめよか」

小蒔「私も早くやりたいです」

霞「あらあら、すぐいやる気ね。でもますはこちらに着替えてくれますか?」

咲「これって巫女装束ですか?」

小蒔「私たちとお揃いです♪」

怜「ウチ初めてやわ、コスプレするの」

咲「本物ですよ! 私ちよつとあこがれてました。まさか本物を着れるなんて。」

怜「咲ちゃんは似合いそうやな。ウチにはどうやろ…」

咲「似合うと思いますよ」

怜「やっぱりか? ウチの儂い雰囲気と美

咲「…黙つてれば」ボソ

怜「なんか言うたか?」

小蒔「なんだか楽しいですね」フフ

霞「さあさあこちらへどうぞ」

「お着がえ中」

咲「準備できました」

怜「なかなか新鮮やな」

小蒔「お二人ともお似合いです」

霞「それにしても咲ちゃんと小蒔ちゃんは似てるわね」

怜「ほんまやな、巫女服でますますそつくりや」

小蒔「光榮です」

咲「いえいえ、こちらこそ光榮ですよ」

小蒔「そんなこちらこそです」

咲「いえいえこちらこそ…」

怜「二人で何してるん」ループ?

霞「似てるのは見た目だけじゃないのかしら」フフ

小蒔「もつと仲良くなれそうです」

霞「春ちゃんが準備してくれてますからそろそろ行きましょうか」

怜「そういえば修行つてどこでやるん?」

霞「これからあなた方を霧島神境にご案内いたします」

小蒔「外の方が来るのは宮守の方々以来ですね」

咲「これから移動するんですか?」

霞「大丈夫ですよ、こちらへどうぞ」

小蒔「離れないでくださいね」

怜「そつち神社しかないで??」

♪鳥居クグル♪

怜・咲「ポカーン

小蒔「ここにいらつしやつた方はみんなそうなりますね」

霞「無理もないと思うわ」

咲「”事実は小説よりも奇なり”とはこういうとを言うんでしょ  
うか?」

怜「ホンマになあ・・・」

咲「なんと言えばいいか・・・神秘的な空間です」

怜「ここになら神様もいそうやな」

霞「ありがとうございます」

小蒔「神様はきっと見ていてくださいますよ」

怜「そもそも二人の存在が“小説より奇なり”やつたな。昨日から普通にしどつたから忘れてたわ」

咲「ここに来ると改めて実感します」

霞「あまりかしこまらなくても大丈夫ですよ」

小蒔「これからも普通に接してくれると嬉しいです」

怜「そやな、昨日は散々遊んだしな」

咲「そうですね、これからも仲良くしてくれると私も嬉しいです」

小蒔「ありがとうございます」パアア

霞「さあ行きましょうか」

春「待つてた。準備はできてる」

怜「まずは何やるん?」

霞「初めは祝詞を読んでみましょう」

怜「祝詞?」

小蒔「簡単に言えば神様に捧げる言葉・挨拶でどうか」

霞「まずは私たちに続いてください。自らの祈りを込めるといいか  
もしれませんね」

怜「わかった（プロに…）」

咲「はい（私の願い…）」

小蒔「高天原に神留坐す…」

・・・畏み畏みも白す」

霞「これで終わりです」

怜「やっぱり難しいなあ」カミカミヤ

小蒔「大丈夫ですよ。本当に大事なのは心ですから」

咲「神様は聞いてくれたんですかね」

霞「宮永さんが真剣に読んだんですから、きっと聞いてくれていま  
す」

春「次は瞑想…こつちに並んで」

怜「瞑想はよく聞きはするな、やつたことないけど」

咲「“心を無にする”とか聞いたことがありますね」

小蒔「無にするですか？」

霞「心を静かに落ち着け、自分の心その奥深くを見つめる。そんな修行です。麻雀のことでも能力のことでもプライベートのことでも、自分を見つめ直してみてください」

怜「そうやな、今回の旅のこと振り返るにはいい機会や」

咲（私の旅の目的、私は強くなるために・・・来たはず）

小蒔「さっそく始めましょう」

春「早く座る・・・」

（瞑想中）

咲（インターハイ団体戦決勝の大将戦オーラス、私は嶺上開花を和了れなかつた。槇はできた、でも和了れなかつた。穂乃ちゃんの思ひが私を上回つたんだと思う）

咲（その後の個人戦は準決勝で負けてしまつた。お姉ちゃんと戦える機会を私は逃した。団体戦のあと仲直りすることができたのは、決勝まで連れてきてくれた清澄のみんな、私に牌を握る機会を与えてくれた和ちゃんのおかげだつた。）

咲（なのに私が負けたから和ちゃんは転校しなければならなくなつた。部長の最後の大会を負けで終わらせてしまつた。）

咲（私が負けたから、私が弱かつたから・・・・だから私は強くならなきやいけない。今年私を導いてくれたみんなを今度は私が

導くために。)

咲（なんとしてでも、どんなことをしても）

咲（強くなるためにいろんな麻雀を勉強している。和ちゃんの雀・部長の麻雀、そして小鍛治健夜。あんな人がいるなら、私だって全部勝てるようになれるはず。この旅も強くなるためのもの）

咲（でも最近はあまり勝ててない、インハイのころよりは強くなつてるはずなのに。何でだろう？やつぱり技術が練習が足らないから？）

咲「・・・・・」ゴゴゴゴ・・・・

春「・・・・・」チラツ

霞「・・・・・」フンフム

小蒔「・・・・・」

怜「・・・・・」チラツ

怜（咲ちゃん・・・どう見ても焦つとるよな、まだ1年生なんやしそんなに焦ることないと思うんやけど。と今は自分のことに集中せな）

（終了）

霞「どうでしたか？」

怜「自分のこといろいろ再確認できだし、少し試してみたいこともできた。たまにはいいもんやね。咲ちゃんはどやつた？」

咲「私もやらなきゃいけないこと確認できました。でも心を静めるつて難しいですね」

小蒔「毎日少しづつでもやっていれば慣れてくると思います」

春「時間は短くても大丈夫・・・」

咲「帰つてからも続けてみます」

怜「ウチもそうしようかな」

霞「この後は舞をやつてみましょか。普段からやつてるものではないんですけど」

春「今日は特別」

咲「私運動はあまり得意じゃないです」

怜「ウチも不安やな」

霞「最初はだれでもそうですよ。とりあえず小蒔ちゃんにお手本を見せてもらいましょか」

小蒔「はい、わかりました。でも友達に披露するのは初めてなので緊張します」

春「姫様ならきっと大丈夫……、準備もできる」

小蒔「宮永さん・園城寺さん見ていてくださいね」

怜「しっかり見とるよ」

咲「頑張つてください」

（舞）

咲「すごい……綺麗です」

怜「ああ……」

小蒔「ありがとうございます」

春「あいかわらず……すごい」

小蒔「お二人もやつてみましょう」

咲「私もあんな風に踊れるんでしょうか」

霞「それは咲ちゃんしたいかしら」

春「すぐにはできないと思う……でも咲ならきっと」

咲「私やつてみたいです」

小蒔「私も初めはへたつぴでしたから大丈夫です」ニコ

怜「私もできるだけやってみるで。覚えて帰つて竜華に見せたら喜

んでくれるやろか」

小蒔「きっと喜びますよ。私も全力でお教えします」

春「私も教える」

咲「二人で頑張りましょう、怜さん」

霞「舞の所作ももちろん大事ですが、その心・精神を意識してやる  
といいと思いますよ」

（修行終了）

怜「疲れただけど、すがすがしい汗やな」フー

咲「そうですね、楽しかつたです」

小蒔「お疲れ様です。とてもお上手でした」

霞「今日の修行はここまでにしましようか」

咲「ありがとうございました」

怜「ありがとうございました。シャワーとか浴びれんやろか？」

春「じゃあ私が案内する・・・咲はしつかりついてきて」

怜「手つなぐか？」ホレ

咲「二人とも心配し過ぎです」

小蒔「お友達を心配するのは当たり前ですよ。私が手をおつなぎましょう」ドウゾ

咲「ううつ、お・・・お願ひします。」スツ

小蒔「はい！」ニコツ

怜「あれは強いなあ」

春「そこは・・・姫様だから」

怜「あの笑顔には誰も勝てへんな」

春「でも・・・手をつないでよかつた。はぐれたら帰つて来れなくなるところだつた」

怜「えつ!?冗談やんな?」

春「・・・」

怜「マジで?」

春「・・・」コクトウパク

怜「いや、どつちやそれ」ワカラソ

霞「まあまあ、宮守の方々は全員で帰られましたよ」

怜「まあそうやろな。ん・・・宮守は??」

霞「さつさあ、はつちやんたちがそろそろお仕事終わるころだと思うので、私は呼んできますね。そしたら麻雀しましようか」アセアセ

怜「・・・春ちゃん手つながん?」ゾゾ

「まーじやん」

初美「さあ麻雀の時間ですよー」

怜「やけにテンション高いやんな」

初美「お二人が来てるのに仕事なんてやつてられませんよー」

霞「初美ちゃん??」ウフフ

初美「も、もちろんちゃんと終わらせましたよ」ヒツ

咲「私も早く打ちたいです」

小蒔「私も頑張ります」

巴「始める前に少しいいですか?園城寺さんって麻雀以外でも未來

が見えるんですか？」

怜「一応秘密やつたんやけど、何で気づいたん？」

巴「それは・・・私たちが異常に敏感だからとしか」

怜「さすがは永水やな。ただこれを知つてるのは竜華だけや。一切他言無用でお願いします」

巴「それは申し訳ないことを聞いてしまいました。すみません」

怜「といつても大したものは見えへんよ。昨日のトランプとか簡単なものなら少し未来が見えるけど」

巴「なるほど」フム

怜「聞いた理由がなんかあるんやろ？」

霞「あなたの力には私たちお同じものを感じていたの。」

怜「同じもの？」

霞「ええ、麻雀以外にも使える力を麻雀に使つてはいる、そしてそれが上手くいってないんじやないかって」

怜「消耗激しいしやな、上手くいってないのかもな」

霞「昨日も言いましたけど麻雀に私たちの力を集中させるのは難しいんです、もともとそのための力ではないですから。園城寺さんの力もそうなんじやないかと思いまして」

怜「まあ未来見える人がいても、それを麻雀に使おうとはならんやろな」

怜「ウチは最初麻雀しか思いつかなかつたけどな」

初美「私たちが麻雀で力を使うときに気を付ける」ととか教えます」

巴「ただ“未来を見る”というその力は私たちに理解しきれるものではありません。ですので必ずしも力の使い方が上達するとは限りませんがよろしいですか?」

怜「もちろんオーケーや。今日やつた修行もこの下準備みたいなもんやつたんか?」

霞「麻雀も修行の一環ですよ」

怜「なるほど。それじゃあビシバシ頼むで!」

巴「ではまずは・・・

怜（必ずものにして帰るから。待つててや竜華!!）

小蒔「宮永さんは私たちと全力で打ちましょ。負けたら罰ゲームですよ」フフ

春「清澄には負けない・・・」

明星「よろしくお願ひします」

咲「罰ゲームですか？」

春「そのほうが面白い」

小蒔「もつともつと仲良くなりたいですから。楽しく麻雀しましょ  
う」

咲「麻雀は全力でやるんですよね？」

春「もちろん・・・勝ちに行く」

小蒔「楽しみながら全力です」

明星「私だつて頑張ります」

咲「・・・はいやりましょう。私も負ける気はありませんよ」フフ

小蒔「はい！」ニコツ

咲（神代さんが全力でやってくれるなら。私も全力で倒す！）ゴツ

春「・・・」

（麻雀終了）

巴 「怜さんどうですか、コツはつかめましたか？」

怜 「さすがに1日でとはいかんみたいやな」

巴 「そうですよね」

初美 「落ち込むことじゃないですよー。私たちだつて未だに苦労しています」

怜 「でも今までがむしやらにやつてたから、すごい進歩や」

巴 「それはよかったです」

霞 「私はすごいスピードで上達していると思いますよ」

怜 「ホンマか!? 石戸さんに言われると安心感がちやうな。母性があふれでとるな」 ウンウン

霞 「ピク

初美 「母性があふれてるのは、きっと一番年上だからじゃないです  
かー」 ケラケラ

霞 「あらあら、私たちは同じ年のはずだけど?」 ニコニコ

初美 「精神的にですよー」

霞 「何が言いたいのかしら? もつとよく聞きたいわね」 ニコニコ

初美「いいんですかー？」言つてしまつて？」

霞「あらまあ」ニコニコ

怜「あれほつといてええんか？」コソコソ

巴「大丈夫ですよ、はつちゃんはお仕置きかもしませんけど、いつものことですから」

怜「・・・ならええか」（触らぬ神に祟りなしやな）

霞（それにしても園城寺さんは上達が早いわね。これも思いの強さ  
かしら。修行の時も思つたけど本当に強い心と思いを抱えている。  
これならもしかするとすぐにでも・・・）

怜「咲ちゃんたちも終わつたかー？」

咲「はい、終わりましたよ」カオニスミ

怜「それどしたん？」

咲「罰ゲームになつちやいまして」ハハ

小蒔「汚れちゃつたけど、すぐ楽しかつたです」クロ

春「やつぱり強い」クロ

明星「完敗です」マツクロ

怜「見比べると勝敗はぶつてどこやろか?」

咲「また勝てませんでした」

怜「そうやな」

小蒔「悔しいです、次はもつと勝ちます」

怜「4人とも楽しそうやな。ちょっとウチもやりたかったわ」

咲「次は一緒にやりますか?私が黒く塗つてあげますよ」

怜「ウチが咲ちゃんに第3の目でも書いたらか?」

咲「どんなセンスですか!?」

怜「なあ咲ちゃん、楽しかったか?」

咲「突然なんですか?乐しかったですよ、こんな罰ゲーム久しぶりです」

怜(罰ゲームか・・・)

小蒔「宮永さん一緒に洗いに行きましょう」オーケイ

咲「神代さん、待ってください」

春 「園城寺さん・・・」

怜 「なんや?」

春 「咲のこと。分かつてるとと思うけど・・・」

春 「罰ゲームは楽しんでた。でも麻雀中は・・・怖かつた。全てを  
圧倒しようとしていた」

怜 「・・・」

春 「ちゃんと見ていて。園城寺さんなら咲に思い出させてあげられ  
ると思う。久の言っていた咲の本来の麻雀」

怜 「原村和でもなく宮永照でもなく、ウチがか?」

春 「私はその二人をよく知らない。でも園城寺さんと咲のことを2  
日間だけ見てて、できると思った。だからお願ひ」

怜 「なんや無責任やな自分」

春 「私は久にいろいろ聞いただけで咲をよく知らないから。お願  
い」

怜 「まあ言われんでもやるけどな。一緒に麻雀楽しみたいからな」

春 「ありがと。・・・久も喜ぶ」ニコツ

怜 「なんや重たいもんを背負うたかもしれんない」

「数日後」

咲「忙しい時期にありがとうございました」

怜「おかげまでこれから希望が見つかりました」

霞「随分大げさなのね」

怜「誇張でもないですよ、実際ウチの目的に一気に近づけたと思います」

小蒔「こちらこそありがとうございました。この数日間は本当に楽しかったです。咲さんは来年のインターハイで絶対に戦いましょう、約束です」

咲「小蒔さん・・・待ってください。必ず約束を果たせる力をつけて見せます」

霞「すっかり仲良くなりましたね。今ならだれでも姉妹で押し通せますね」

怜「心なしか咲ちゃんの胸も大きくなつたような・・・」

咲「本当ですか!? きっとあの温泉が・・・」

怜「やっぱり気のせいやな。というかけつこう氣にしてたんやな」

咲「気にしますよ!! 周りがこんなのはばっかりだつたんですから」

霞「あはは・・・」

小蒔「??」

怜「まあ確かに、もう一緒に風呂入りたくはないかも知れへんな」

小蒔「ええつ!? 何でですか? 悪いところがあるなら直しますから」

咲「小蒔さん・・・それは無理です」

小蒔「ええつ!?」ナンデ

咲「むしろ私を直してください!!」

怜「咲ちゃん落ち着き。キャラがおかしなつとる」

霞「小蒔ちゃんも落ち着いて。それよりも来年があるのは羨ましいわね」

怜「そやな。ウチらはインターハイは1回だけやつたからな」

霞「次はどうするんですか? 旅はまだ続けるんでしょう?」

怜「もう今年も終わりやし、いつたんは帰省やな。そこから先は竜

華とかにも聞いてからやな。これまでのことの振り返りもしこときた  
いし」

咲「そうですね。一度帰つてお父さんに顔も見せないと心配するで  
しょうし」

怜「次があるとしても年が明けてからやな」

小蒔「なるほど、私も旅の無事をお祈りしています」

怜「こんなに心強いこともないな」

咲「では改めてありがとうございました。この恩はいつか必ず返し  
ます」

霞「またいらしてくださいね」

怜「それじゃあ、ホンマおおきに」バイバイ

幕間

（12月31日・大阪）

怜「今年は麻雀漬けの1年やつたなあ」

竜華「ほんまになあ」

怜「麻雀やりに鹿児島まで行くとはな、自分でもびっくりや」

竜華「なら来年は海外でも一緒に行こか？」

怜「プロなつたらそんな時間ないやろ」

竜華「オフなら行けんちやうかな？ハワイとか行つてみたい！」

怜「そいや霧島神境の海綺麗だつたで、夏行けば海水浴もできただのになあ」

竜華「怜ばっかりずるい！」

怜「そんな言うても、しようがないやろ。永水行は急遽決まつたことやつたし」

竜華「ウチが必死に怜の遠征先を探してるときに、怜は咲ちゃんと二人で・・・」

怜「ちゃんと修行しどつたよ」

竜華「帰つてきてから妙にニヤニヤしとるときあるし」

怜「べ、別にクリスマスパーティーなんてしとらんよ」

竜華「やつぱり!! ウチもしたいーー!」

怜「大晦日に何言うてん」

竜華「大晦日なんて関係ないで」

怜「しゃあないやろ、福岡でやつたんたで?」

竜華「手作りケー‌キ美味しかったんやろ」フン

怜「確かに美味しかったけど、竜華の料理も美味いで?」

竜華「咲ちゃんから本貰つて嬉しそうに読んどるし」

怜「ええやろ、せつかくもらつたんやから」

竜華「怜はなんかあげたんか?」ツーン

怜「一応ブレスレットを…(あれはあげたつてことでいいんやろ  
か?)」

竜華「ウチはクリスマスプレゼントすらもらつてない!」ガーゲー

怜「セーラくれなかつたんか?」

竜華「そいやない!」

怜「わかつてるから落ち着き竜華」

竜華「ウチがあげたマフラー頑張つて選んだんやで?」

怜「ありがとな」

竜華「ウチは怜からもらいたいんよ」

怜「せやな、明日初詣終わつたら一緒に買いに行こか」

竜華「絶対やで？」

怜「約束や」

竜華「ルンルン

怜（咲ちゃんへのプレゼントも買うとは言えへんな・・・なぜか後ろめたいな・・・）

♪長野♪

咲「お蕎麦できたよー」

界「おう、今行く」

咲「ちよつと奮発して天ぷら蕎麦にしてみたよ」

界「おついいじやないか！あいつらも帰つてくれれば食べれたのに  
な」

咲「テレビでるんでしょ、ならしようがないよ」

界「今年くらい断つて帰ればいいのにな」

咲「まあ来年からはいつでも会えるよ」

界「そうだといいけどな」

界「それより、九州はどうだったんだ? 福岡と鹿児島だつけか?」

咲「楽しかったよ、クリスマスパーティーしたり、巫女さんの修行したり」

界「修行?」

咲「舞っていうのかな? 初めて踊つたりしたんだよ」

界「どこでそんなことしたんだ?」

咲「霧島神境って言つてたよ」

界「神境つて・・・お前麻雀しに行つたんじやなかつたのか?」

咲「そうだよ?」

界「最近の麻雀はわからないことが多いな」

咲「でも急にわがまま言つたのに聞いてくれてありがとう」

界「咲のわがままなんて珍しいからな。もつと言つてもいいんだぞ」

咲「それじゃあさつそく、お皿洗つといてね」

界「おう」

（咲ルーム）

咲（今年の最後くらいお姉ちゃんに会いたかつたな）

携帯「ピロン」

咲（誰だろ？）

照『咲、久しぶり。大晦日なのに帰れなくてごめんね。私は咲に会いに行きたかったんだだけど、母さんがどうしてもテレビ出ろつとうるさくて。冬休みは帰れないけど卒業したら絶対帰るから』

咲「お姉ちゃん!? うーんと…」

咲『春休みは楽しみに待ってるね。明日のテレビみんなで見るよ、お父さんも録画するつて。あと和ちゃんよろしくね』

照『なんだか恥ずかしいな。でも高級お菓子貰う約束したから必ず勝つよ。あのおっぱいには負けない』

咲（おっぱいって…でも気持ちはわかるかも）

咲『私は最近怜さんと麻雀の特訓に全国回ってるんだ。そのうち白糸台にも行けたらいいな』

照『楽しみにしてる、ただ咲は無防備すぎるよ。人に簡単に寝顔の写真とか撮らせたらダメだよ』

咲『写真？なんの話？』

照『怜からこんな写真が送られてきた』

添付（咲の寝顔・巫女衣装の咲）

咲（これっ！？消したって言つたのに！？）

咲「怜さんっ！？」ゴツツ

怜「くしゅんっ、なんや急に寒気が・・・」

照『怜が羨ましいけど、咲が心配になるから少し気を付けてね。怜はなんとなく危ない氣がする』

咲『怜さんなら大丈夫だと思うよ・・・多分。でも心配かけられな  
いし、気を付けるね』

照『明日、朝早いからそろそろ寝るね。おやすみ、よいお年を』

咲（おやすみ、お姉ちゃん。なんとなく、来年はいい年になりそう  
だな）

咲「スヤスヤ

（1月1日・大阪）

竜華「ときー」ブンブン

怜「あけましておめでとうや、竜華」

竜華「あけましておめでとう！振り袖似合うてるで」

怜「竜華こそや。それにしても人多いなあ」ハア

竜華「正月やからなあ、しゃあないやろ。新年やし明るくいこや」

怜「そやなあ」

竜華「なんやテンション低いなあ、ほらおみくじ引いてみいひんか？」

怜「ウチは大吉やな」

竜華「随分な自信やな。ウチは・・・中吉か、まあまあやな」

怜「・・・これや」

竜華「どやつた？」

怜「ほれ」ドヤツ

竜華「大吉・・・未来見てへんやろな？」

怜「おみくじで見てもしゃあないやろ」

竜華「ということは天然物かっ！」

怜「天然物つてなんやねん、ウチには神様がついとるからな」

竜華「ほんまか!? 怜は凄いなあ神様まで味方にしたんか」

怜「まあな、ちよつと天然な可愛らしい神様やつたけど」

竜華「怜はどんどん人間離れしていくな」

怜「それは誓めてるんか?」

竜華「もちろん! 次はお参り行くで」

ガランガラン

竜華「パンパン

怜「ナム

竜華「怜は何お願いしたん?」

竜華「ウチは来年も三人一緒にプロなれるようにつて」

怜「人に教えたら叶わなくなるんやで」

竜華「そうなんか!?」ガーン

怜「まあウチもおんなんじやけどな」

怜「願いが届かんくとも、三人でちゃんと叶えればええよ」

竜華「ウチのせいでプロ入りが・・・」アアア

怜「いつまでやつとんねん！ほらクリスマスプレゼント買いに行く  
んやろ」

怜（あとは咲ちゃんが楽しく麻雀できまさ）ように・・・神様ほんま  
に頼むで）

竜華「せやつたな。さつそく行（）や」

怜「あんまり急ぐとこけるでー」

怜（咲ちゃんようのアレあるやろか）

（長野・r o o f t o p）

咲「あけましておめでとうございます」

ま」「あけましておめでとう。今年もよろしくな」

優希「おめでとうだじえ！」

久「おめでとう。鹿児島はどうだつたかしら？」

咲「事前に教えてくれたらよかつたのに、びっくりしましたよ。で  
もありがとうございました」

久「お礼なんていいわよ。ただ部長の仕事をしただけよ」

咲「怜さんも喜んでましたし、よろしく伝えてくれと言つてましたよ」

優希「二人ともそろそろ始まるじえ」

まこ「インハイトップ3に勝つたら100万円」じゃったか、新春らしい企画じゃな」

優希「これでのどちらんもスターだな」

久「それはまだ気が早いんじゃないから」

まこ「わからんぞ、中学チャンピオンで今年は3位、加えてあの見た目じやからな」

咲「テレビ通して見ると、アイドルって言われても違和感ないですね」

久「宮永照も荒川憩も負けてないと思うわよ」

まこ「一ヶ所だけ完敗しとるけどな」

咲「あはは」

優希「それじやこつちも始めるじえ、今年の打ち初めだ！」

久「咲の旅の成果見せてもらいましょうか」

咲「はい！負けません」

まこ「後で藤田プロも来てくれるからな、力を試すにはちょうどいい機会じゃな」

優希「よーし、サイコロ回すじえ！」

咲「ゴツ

久（あいかわらず本気ね、本気なのはいいことなんだけど  
まこ）（もっと力抜いてもいいと思うんじやが・・・）

優希（このプレッシャー、宮永照を思い出すじえ）

咲（・・・負けない）

（大阪）

竜華「マフラーありがとな」ルンルン

怜「疲れた・・・」

竜華「人多かつたもんなあ」

怜「はやく帰ろうや」

竜華「そやな」

怜「そりいえば聞きそびれてたけど、遠征先つて見つかったんか?」

竜華「あれ聞いてへんの?」

怜「聞いてへんよ」

竜華「まづは阿知賀や」

怜「おお、あそこも能力使う人多かつたなあ」

竜華「ウチの分までインハイのリベンジしてきてな」

怜「えつ? 竜華は一緒に行かんの?」

竜華「他に交渉中のところもあるし、咲ちゃんいれば安心やしな」

怜「そうか一緒に行きたかったなあ」

竜華「・・・やつぱり一緒に、いやでも」

怜「それで阿知賀行くのいつからなんや?」

竜華「明日到着の予定やで」

怜「・・・ん?」

竜華「明日到着やで」

怜「あほか!! 今知つて明日到着つて無理やろ! 咲ちゃんは知りもせ

んのに」

竜華「大丈夫やつて、連絡してあるし」

怜「なんでウチすつ飛ばして咲ちゃんに連絡いつとんねん!？」

竜華「怜のお母さんにも連絡いつてるはずやけど、ほんまに聞いてらんの?」

怜「……ほんまに聞いてないで、……オカン」ハア

竜華「なら早く帰つて準備しようや」

怜「そうやな」

怜（今日プレゼント買いに来といてよかつたな）

竜華「ぼさつとせんと、おいくでー」

怜（急で驚いたけど、竜華には感謝せなあかんな。プロまで頑張ら  
なな！）

## 阿知賀の巻1

「松実館」

怜「すっかり遅れてもうた、咲ちゃん怒つてへんやろか」

玄「お待ちしておりました。お久しぶりです、園城寺さん！」

怜「玄ちゃん久しぶりやな」

玄「インハイ以来ですね。さあこちらへ、咲ちゃんが首を長くして待ってますよ」

怜「やつぱり怒つとるか？」

玄「ふふつ、自分で確かめて見てください」

怜「気が進まんなあ」

玄「さつこの部屋です。私はまだ仕事が残つてますから、後でお邪魔しますね」

怜「ありがとうございます」フー

ガラガラ

怜「咲ちゃんゴメン!!」のとおりや！」

「

怜「あれっ・・・」チラツ

こたつ「・・・」

怜「・・・」

こたつ「・・・」

怜「玄ちゃん、部屋間違えたな」ハハーン

こたつ「モゾツ

怜「ビクツ

怜「だつ、誰かいるんか?」

こたつ「モゾゾツ

怜「咲ちゃん?」

咲「ううん、誰ですか?うるさいです」ゴシゴシ

怜「よかつたで、知らない人の部屋でいきなり謝り倒したかと思つ  
たわ」

咲「怜さん?」

怜「怜さんやで」フフン

咲「・・・おやすみなさい」

怜「なんでやねん。ウチつて理解してから寝たやろ今?」

咲「阿知賀のみんなと麻雀打つて疲れたんですよ」

怜「去年ぶりの再会やで、もつと喜んでくれてもええやろ」

咲「3日ぶりですよ、1年ぶりみたいに言わないでください」

怜「ウチは会いたかったで」

咲「・・・おやすみなさい」

怜「なんでや!?」

咲「疲れたんですよ、誰かと違つて」

怜「ウツ、やつぱり怒つとる?」

咲「怒つてません」ツン

怜「お願いやから堪忍してや」

咲「怒つてないので堪忍も何もありませんよ」

怜「怒つとるやんか」

こたつ「もぞもぞ」

怜「えつ!?他に誰かいるん?」

咲「いますよ。こゝ玄さんと宥さんの部屋ですし」

こたつ「うそごそ」

宥「うーん・・・園城寺さんお久しぶりです」

怜「おつお久しぶりや・・・今までこたつの中おつたんか?」

宥「すごーくあつたかいよ」

怜「今までの話聞いてたんか?」

宥「うん。咲ちゃん心配してたんだよ、園城寺さんなかなか連絡とれなかつたから」

咲「ちよつ、宥さん!？」

宥「練習中もうわの空で”怜さん大丈夫かな?”って呟いてて」

咲「ううつ・・・」チラツ

怜「ニヤニヤ

宥「連絡取れたときは、ほんとに安心してたよね」

怜「連絡遅れてすまんかった、そんなに心配してくれるとわ思わんかつた」

咲「別に心配なんて・・・

怜「してくれたんやろ、嬉しいもんやで」

咲「そ、そもそも怜さんが誘つといて遅刻するのが悪いんです」

怜「堪忍してや」

咲「私一人だつたんですからね！」

怜「申し訳ないことしたわ、二度と会えんくなるところだつたな」

咲「私の迷子癖なめないでください」

怜「自分で言うほどか!?」

宥「あつたかいねー」

ガラガラ

玄「お待たせしました」

宥「玄ちゃんお仕事は終わつたの？」

玄「友達が来てるなら先にあがつていいつて」

怜「玄ちゃんの仲居さん様になつとつたなあ、着物も似合うてたし」

咲「しつかり者のお姉さんつて感じでした」

宥「玄ちゃんはお仕事の時はしつかり者だから」

玄「ありがとうございます」

怜「着物はロングヘアの人気が髪をアップにするのがええよな」

咲「ショートも着物似合うと思いますよ」

怜「普段見せないうなじがええんよな」

玄「マニアックですね」

咲「それ単に竜華さんのこと言つてるだけですよね」

宥「確かに清水谷さんは着物似合いそうだねー」

咲「怜さんより似合うと思います」

怜「一言余計や。玄ちゃんはどう思う?」

玄「私はやつぱりおもちですね」

咲「おもち?」

玄「おもちが帶でこう・・・

宥「玄ちゃん・・・着物関係ないよね」

玄「は、はい」ブルツ

咲「怜さんが玄さんに聞くから、玄さんが怒られましたね」

怜「なあ咲ちゃん?」

咲「はい?」

怜「今日ウチへの当たりきつく無いか?」

咲「遅刻したからですよ」

怜「そやけど・・・うーん」

咲「実は竜華さんに言われてまして」

宥「何を言われたの?」

→回想・電話→

咲「次は阿知賀ですね、了解です」

竜華「今度も怜のこと頼むで」

咲「任せてください」

竜華「でもあんまり甘やかさんといてな」

咲「?甘やしてはないと思いますけど」

竜華「怜帰つてきてから咲ちゃんとパーティーしたとかお風呂入ったとかそんな話ばっかりや」

咲「確かに事実ですけど」

竜華「特訓に行つたはずなのにな」

咲「特訓もちゃんとしてましたよ」

竜華「まあそういうことやから甘やかさんと厳しくしたってな」

咲「は、はい」

竜華「信用しとるからな」

（回想終了）

咲「というやり取りがありまして」

怜「厳しくつてこういうことなんか？」

咲「それからもう1つ……」

怜「まだ何かあるんか!?」

咲「怜さん遅刻以外で私に謝らないといけないことがありますか？」

怜「遅刻以外……うーん……」

咲「はあ……お姉ちゃんに写真送りましたよね」

宥「写真？」

怜「ギクッ!? なんで知ってんねん?」

咲「ギクッて。お姉ちゃんが教えてくれましたよ」

怜「秘密にする約束やつたのに……」

玄「そんなに恥ずかしい写真なんですか?」

怜「ただの寝顔やよ」

咲「ただのつて何ですか!? あれだけダメだと言つたのに」

宥 「それは怒られてもしようがないよ」

怜 「阿知賀でのウチのイメージが、どんどん悪く」

咲 「イメージより私を気にしてください!!」

怜 「せやかて、あの写真見ても „咲ちゃん可愛い“ しか思わんて」

咲 「なつ!?」 // //

怜 「照にしか送つとらんし、なんも悪いことないで」

咲 「悪いです！私がすり減ります！」

宥 「園城寺さんが悪いかな」

玄 「私にも・・・じゃなくて謝ったほうがいいと思います」

怜 「ごめんなさい」

咲 「反省が感じられません」

怜 「厳しない!？」

宥 「これは私たちも厳しくした方がいいのかな?」

怜 「勘弁してや」

玄 「遅刻もしましたししようがないのですのだ」

怜「なら一つ言うこと聞くから勘弁してや、咲ちゃん」

咲「そうですね・・・じゃあ膝枕しますか?」

怜「してくれるんか!?

咲「何ですか」 ハア

玄「それじゃご褒美ですね」

咲「怜さんが私にです」

怜「竜華にはいつもやつてもらつてるけどウチはやつたことないな  
あ」

玄「なら初体験ですね」

咲「怜さんがいつもしてほしいって言つてるので私も気になつてた  
んですね」

怜「そのくらいならお安い御用や、ほれ」

咲「し、失礼します」 ドキドキ

怜「どう? 気持ちええやろ」

咲「初めてだからわかりません」

怜「貴重やからなしつかり堪能してや」 ナデナデ

咲「まるでお姉ちゃんになつたみたいですね」

怜「それもええかもな、照になら勝てるかもしねへんな」ナデナデ

咲「何の勝負ですか!?でもお姉ちゃんは負けませんよ」ウト

怜「チャンピオンやもな。疲れたんやろ、このまま寝てもええで」

咲「また撮るんですか?」ジト

宥「私たちが見張つてるよ」

咲「宥さんなら安心ですね」

怜「ウチの信頼が減ったなあ」

玄「自業自得ですのだ」

怜「そういうわけだから安心して寝や」

咲「・・・そのまでいてくださいね」

怜「わかった。ほなおやすみや」

咲「・・・はい・・・おやすみなさい」スー

宥「やっぱりあつたかいねー」

玄「なんだか羨ましいのです」

怜「誰にもやらんからな」

宥 「そもそも園城寺さんのじやないですよ」

玄 「清水谷さんに報告して方がいいかもしませんね」

怜 「それは堪忍してや」

宥 「今日は誤つてばかりですね」 フフ

怜 「せやなあ」 ナデナデ

玄 「咲ちゃん本当に心配してましたから、園城寺さんも気をかけてあげてくださいね」

怜 「遅刻してごめんな。心配してくれてありがとうございます」

宥 「明日はあつたかいといいね」

怜 「そうやな。二人も明日からよろしゅうな」

玄 「お任せあれ!!」

咲 「・・・・・」 スースー

怜 「・・・・・」 ナデナデ

## 阿知賀の巻2

（阿知賀女子学院）

咲怜玄宥「おはようございます」

晴絵「おはよう！園城寺も無事着いたみたいでよかったです」

怜「心配おかげしました」

咲「まつたくほんとですよ」ハア

穏乃「園城寺さん、お久しぶりです！」

怜「あいかわらず元気やなあ。憧ちゃんも灼ちゃんもお久しぶり  
や」

憧憬「今日はよろしくお願ひします」

晴絵「揃つたし、さつそく打ちますか」

怜「インハイの借り返したるからな

灼「園城寺さんは負けてないと思……」

玄「私がリベンジします。インハイからの練習の成果を見せてみせ  
ます！」

咲「やけに燃えてないですか？」

穏乃「園城寺さんは玄さんの目標の一つだったしね」

憧 「園城寺さんと宮永照に勝つのが目標みたいだからね」

怜 「ほほう、越えられるもんなら越えてみ!」ドヤツ

咲 「玄さん、10局以上の耐久勝負にすれば、多分勝りますよ」

玄 「なるほど!!」

灼 「それじゃ意味な・・・」

晴絵 「それに今の玄なら10局やれば勝てる局もあるんじやないか」

怜 「ウチかてインハイから強なつとるからな、そう簡単には勝たせへんで」

灼 「あれ以上強いとか、プロレベル・・・」

怜 「鹿児島での巫女さん修行の成果見せたる」

晴絵 「巫女さん? なんだそれ?」

怜 「永水に修行つけてもらつたんよ、まだ未完成やけど」

玄 「永水!!?」

晴絵 「面白そうじやないか」

怜 「何か気づいたことあれば、助言お願ひします」

晴絵 「おう、まかせとけ」

咲「無理はしちゃダメですかね」

穏乃「うおー！こつちも早く打とう！」

咲「そうだね。今日こそはリベンジするよ」

宥「昨日は穏乃ちゃんの勝ち越しだったね」

憧「二人とも本気すぎ、インハイの決勝で打つてる気分よ」ツカレ  
ル

穏乃「だつてだつて、咲と打てるなんて本気でやらないと損だよ！」

咲「私も全力でリベンジします」ゴゴゴ

宥「二人ともあつたかいねー」

憧「熱すぎよ」

穏乃・咲「お願いします」ゴゴゴ

玄「勝てない・・・」シロメ

宥「大丈夫？」

怜「まだまだ精進やな」

咲「怜さんもじやないですか」

怜「確かにまだ2順先は安定せんな」

晴絵「二人ともインハイから成長してるな、末恐ろしいよ」

咲「あまり実感ないですけど、そうですかね？」

憧「十分強かつたわよ」ゲツソリ

穂乃「正直なんで勝てたかわかんない」

晴絵「うんとな、咲はいろんな打ち筋を覚えてるんだろ？」

咲「はい。最近だと永水の春ちゃんとか意識してみたりします」

晴絵「それが一時的に悪く作用してるな」

咲「どういうことですか？」

晴絵「咲が覚えた打ち筋と咲本来の打ち筋がうまく組合わさつてないな」

憧「それで？」

晴絵「1局ごとに打ち分けるのはできる見たいだけど、それじゃあ元の人の劣化でしかない、少なくとも今はね」

怜「なかなか辛口やな」

晴絵 「今の段階でも奇襲には十分使えると思うよ」

灼 「それで十分なんじや・・・」

晴絵 「咲はもつと上を目指したいんだろ」

咲 「はい。もう負けたくないんです」

晴絵 「あとは1局の中でも打ち筋を変えようとしてるのがうまくいってないな」

咲 「それが難しくて・・・」

晴絵 「本来の打ち筋に十 $\alpha$ くらいに考えた方がいいんじゃないか」

穏乃 「そうだよ。咲は他の人の真似しなくても元々強いんだから」

憧 「そんな簡単な話じやないでしょ」

晴絵 「そうでもないぞ。他の人の打ち筋を真似るんじやなくて本来の打ち筋に取り入れる、それができればどこまでも強くなれると思うよ」

晴絵 「その前の段階として真似るのはいいと思うけどな、技術的なものはこんなとこかな」

咲 「なるほど・・・ありがとうございます、すぐ参考になります」

晴絵 「今結果がついてこないのも、そこまで気にすることじゃない。蝶になる前の蛹の時期つてやつだ!」

怜「阿知賀のレジエンドはさすがやな」

灼「でしょ・・・」

晴絵「なんでその呼び名を知ってるんだ!?」

怜「さつき灼ちゃんが自慢しとつたで」

灼「的確なアドバイスかつこよかつた・・・」

怜「レジエンドさん、ウチにはなんかアドバイスないんか?」

晴絵「やめてくれ。園城寺の力は私では教えられないな、ただもうやるべきことは分かつてるようだつたが?」

怜「永水で教えてもらつたことを追求していこうとは思つとる」

晴絵「なら私が相手になるよ、これでもプロに誘われるくらいには強いぞ」

玄「永水なら私にも教えてほしいです!」

宥「やつと復活したよ」

憧「玄もぶれないわね」

穏乃「アドバイスもすんだしもう一度打つぞー」

憧「あんたもぶれないわね!」

咲「阿知賀はいつでも楽しそうですね」

宥「咲ちゃんたちも楽しそうだよ」

穏乃「早く打とうよー」

憧「あーもう、わかつたわよ！ほら咲打つわよ」

咲「負けないよ」

（練習終了）

怜「2順先も少しだけなら見えるようになつたな」

咲「体調は大丈夫ですか？」

怜「前よりは全然疲れなくなつたわ」

玄「気をつけてくださいね、みんな心配してますから」

怜「ありがとな、常時2順先を見るのはまだ無理やけどええ感じに成長できてる」

穏乃「巫女さんの修行つて凄いんですね」チラツ

憧「私見られても、修行なんてしたことないわよ」

灼「普通ないと思……」

宥 「永水つて凄いんだねー」

怜 「ただ能力が変わつてきてるのか、扱いが難しくなつとる感じはするんよな」

咲 「うーん、難しいですね」

晴絵 「あまり力になれなくてすまない」

怜 「いえ、強い人と対局できるだけでとても練習になるんで」

晴絵 「ありがとうございます、この後はどうするんだ?」

咲 「憧ちゃんのお家に初詣行くんですけど、怜さんも行きますよね」

怜 「もちろんや。初詣は2回目やけどな」

玄 「私たちはお手伝いがあるので先に帰つてますね」

宥 「楽しんできてね」

穏乃 「じゃあ早速行きましょう!」

怜 「しかし憧ちゃんも巫女さんやつたとはな」

憧 「私はなんちやつてですけどね」

穏乃 「ご利益ありますよきつと、去年の私のお願ひは叶いましたか  
ら!」

咲「へー、何をお願いしたの？」

穏乃「和とまた遊べますようについて」

憧「ある意味咲が叶えてくれたと言えるかもね」

怜「咲にもお願いしといた方がええかな」

咲「なんですか！」

穏乃「来年もインハイに行けますように」ナム

憧「私はそうね・・・

咲「穏乃ちゃんも憧ちゃんもやめて！」

憧「まあまあ落ち着いて、ほら着いたわよ」

怜「立派な神社やね」

穏乃「せつかくだしお賽錢奮発しよう」

カラソカラソ

咲・怜・穏乃・憧「」

穏乃（今年もみんなでインハイに行けますように）

憧（今年も穏乃とインハイに行けますように）

咲（怜さんがプロ入りできますように、あと強くなれますように）

怜（咲ちゃんがまた麻雀を楽しめますように、あとプロ入りもお願いします）

穏乃「お二人は何をお願いしたんですか？」

怜「咲ちゃんがもつと優しくなるようにつてな」

咲「もつと厳しくして欲しいんですか？」ニコツ

穏乃「もう十分優しかったじゃないですか？」

咲「えつ？今日私厳しくなかつた？」

憧「えつ？厳しくしてつもりだつたの？」

怜「去年はもつと優しかつたんやで」

穏乃「咲はもともと優しいんだね」

憧「あれで厳しくしてつもりなら、諦めた方がいいかもね」

咲「そんな・・・」

怜「ほら膝枕してくれてええんやで」

咲「・・・絶対しません」フン

憧「素直じやないんだから」

穏乃「憧も人のこと言えないんじゃない」

怜「素直な方がモテるで」

咲・憧「余計なお世話です！」

（帰り道）

怜「・・・」

咲「・・・」

怜「なあ咲？」

咲「急に何ですか？」

怜「・・・麻雀楽しいか？」

咲「最近は勝つことに必死ですから」

怜「ですから？」

咲「・・・楽しんでる暇なんてありません」

怜「暇がないと、楽しんだらアカンのかな」

咲「アカン訳じやないと思いますけど、余裕がないんですよ」

怜「余裕がないから楽しめないんやなくて、楽しんでないから余裕がないんやないかな」

咲「？よくわかりません」

怜「咲ちゃんと対局してると必死さが伝わってくるよ、それと同時に余裕の無さもな」

咲「・・・・・」

怜「勝てない理由の1つはこれやろな、余裕のない人の手は読みやすいやよ」

咲「楽しむつてそんなに大事ですか？」

怜「麻雀なんて楽しんでなんぼやと思うよ」

咲「インハイはみんな必死で勝ちに行くじゃないですか」

怜「必死で勝ちに行くから楽しいんやないか。チャンピオンも個人戦のあと『楽しかった』言うとったで」

咲「お姉ちゃんも？」

怜「あんな顔して麻雀打つてるのにな」

咲「あんな顔つて」

怜「咲ちゃんも予選て天江衣に言つたやろ『麻雀つて楽しいよね』つて」

咲「あの時は・・・」

怜「まあ考え過ぎるのも逆効果やから、気楽に考えとき」

怜「全勝目指すのもいいけど、負けたって楽しい時もあるで。むしろ本当に全勝なんてできたら、それこそ楽しくなくなるかもな」

咲「・・・」

怜「なんや暗くなつてしまもたな、そや咲ちゃん昨日の遅刻の理由知りたないか?」

咲「どうせ寝坊とかじや無いんですか?」

怜「・・・」

咲「怜さん?」フリムキ

怜「メリーカリスマス」

咲「・・・え、えつ!?」

怜「用意するのに時間がかかるてもうてな、昨日間に合わなかつてん」

咲「すごく嬉しいです・・・開けてもいいですか?」

怜「もちろん。気に入るとええけど」

咲「・・・きれい」ポー

怜「スノーフレークつて花のペンダントや」

咲「怜さんが着けてくれませんか?」

怜「ほれ後ろ向き」

咲「はい」

怜「・・・できたで」カチツ

咲「どうですか?」クルツ

怜「うん、似合つとるよ」

咲「ありがとうございます」

怜「ちやんと選んで良かつたわ」

咲「スノーフレークつてマイナーだと思いますけど、どうしてこれにしたんですか?」

怜「百合と迷つたけどな、こっちの方が咲ちやんに合つてると思つたんよ」

咲「嬉しいです!!」

怜「・・・あとは花・・・いやその」

咲「怜さん何やつてるんですか、置いてつちやいますよ!」ホラホ

ラ

怜「・・・ん?! ちょお待てや! 1人じや迷子なるやろ!」

咲「早く早く」

怜「待てつて」

咲「はあはあ」

怜「急に止まつてどないしたん?」

咲「・・・怜さん私文学少女なんです」

怜「知つとるけど、急になんや?」

咲「それだけです」

怜「??、なんやねんな、ほら行くで」

咲（怜さんのくれたもの大事にしますから）

## 白糸台の巻1

咲「ついに来ましたね」

怜「竜華もいい仕事してくれるわ」

咲「なんてつたつて間違いなく日本一の高校ですからね」

怜「旅の最後にはもつてこいやな」

咲「・・・やっぱり最後なんですか？」

怜「しゃあないやろ、もうすぐ冬休みも終わりやし」

咲「そう・・・ですよね」

怜「そんな寂しそうにすんなや、別にこれから会えんくなるでもなし」

咲「もう2週間近く一緒にいるんですよ、寂しくないはずないじやないですか？」

怜「そりやウチも寂しいよ、けどまだ寂しがるには早いわ」

咲「すみません、朝から暗くなっちゃいましたね」

怜「元気よくいかんと、白糸台に負けてまたやろ」

咲「本当にやるんですか？」

怜「ああ、ウチは照に挑む。もちろん勝つつもりでな、やから少し

の無理は見逃してな」

咲「・・・少しだけですよ、無理だと思つたら私の判断で止めますからね」

怜「それでええよ、咲ちゃんを信頼しとるからな」

咲「・・・じゃあ行きましようか」

怜「いざ白糸台や!!」

「白糸台高校部室」

誠子「弘世先輩!全員集まりました」

董「ありがとうございます。今日は練習の前にみんなに伝えることがある」

淡「えー何々!?もしかしてサプライズツ!?

照「私たち二人からみんなにね」

ザワザワ

堯深「ほんとにサプライズなんですか?」

董「まあな、今日のゲストはきっと最高の練習になるだろう」  
(決まったのが直前だつただけとは言えんな)

照「私たちが呼べる最高の二人だと思うよ」

淡「気になる!スミレ早く早く!」

董「わかったから、そう焦るな。二人とも入ってくれ」

「そんなに持ち上げられると、入りにくいじゃないですか？」

「お姉ちゃんに誉められて嬉しかったんやろ、素直やないんやから」「ク  
クク

「な、何言つてるんですか!?」

ザワザワ

誠子・堯深・淡「「・・・・・」」

照「・・・え」アゼン

怜「千里山の園城寺怜です。よろしゅうお願ひします」ペコ

咲「清澄高校の宮永咲です。お姉ちゃんがいつもお世話になつてます」ペツコリン

照「・・・なんで」アゼン

誠子「なんで先輩が驚いてるんですか?」

怜「それはな照は竜「サキだーーー!!」

怜「急になんやねん!」

淡「逃げるつ！」ダツ

董「逃がすかっ」ガシツ

堯深「さすがです、淡ちゃん残念だったね」

咲「淡ちゃん何で!? 恋さん私なにかしました!?!」

怜「どないやろな」

照「怜・・・これはどういうこと?」ゴゴゴ

怜「だからこれは竜「はーなーせー!」

董「このつ!? 亦野お前も来い」

誠子「はいっ!」

咲「怜さん、なんで・・・」

照「怜」ゴゴゴ

堯深「園城寺さんお茶どうぞ」「ハイ

怜「・・・」

怜「自由か! 弘世お前まとめろや、何一緒に遊んでんねん!」

董「二人が来ればこうなることは、だいたいわかっていたからな。  
あえて放置してみた」

怜「無駄な実験すなよ、白糸台はいつもこうなんか?」

董「ほら」

部員「虎姫はだいたいこうです」

部員一同 「コクコク

怜 「なんやすごいとこ来てしもうたな・・・」

董 「虎姫ルーム」

董 「気を取り直して、二人とも歓迎するよ」

怜 「とても歓迎されてるとは思えんのやけど」「

照 「ゴゴゴ

董 「こら照、いつまでやつてるんだ」ハア

照 「ごめんなさい、でも怜。今日は竜華と一緒に来るんじゃなかつたの？」

怜 「？もとから咲ちゃんとの予定やつたけど」

董 「私から照へのサプライズだ。なかなか面白い照が見られたな」  
マンゾク

誠子 「確かにあんな先輩はめったに見れませんね」

照 「・・・董、あとで私の部屋に来て。話があるから」

董 「」

怜 「自業自得やな。で大星はどないしたん？」

堯深「お互に警戒してて、全然喋りませんね」

咲・淡「……」

咲「……淡ちゃん？」

淡「サツ

誠子「そんな隠れなくても大丈夫だって」

堀深「どうもインハイから苦手意識があるみたいで……」

怜「大星が勝つたばすやろ、うーん??」

咲「うう、どうして?」

董「ほら淡話してみろ、黙つてちや分からんだろ」

淡「……サキは私のこと嫌いなんでしょ?」

咲「えつ?」

淡「団体戦のとき、敵意剥き出しでオーラぶつけてくるし」

咲「あれは叩き潰せば「ほらやつぱり!」

淡「叩き潰すつて何!? 素直にコワイよ!」

咲「……あはは」

淡「そのあとの個人戦でも、"団体戦の怨みー!"ってオーラぶつけ

てきたし」

咲「あれは和ちゃんのことがあつて、冷静じやなかつたから」

淡「オーラぶつけてきたのは本当じやん！」

咲「そうですけど……」

堯深・誠子「……」

怜「咲ちゃん、あんまりオーラを人に向けちやダメや」

董「怖がられても、文句は言えんな」

咲「……」

照「あんまり咲をせめないで」

咲「お姉ちゃん」パア

照「でも叩き潰すのはどうかと思う」

咲「」

咲「ごめんなさい、あの時は自分のことに必死で自分のことしか考  
えてなかつたから」

淡「……」

咲「これからはちゃんと淡ちゃんのこと考えて行動するから、嫌い  
にならないで」ジーッ

淡「も、もともとちょっと怖かつただけで、嫌いではないから。むしろ…」

咲「淡ちゃん」パアア

董「それなら仲直りのハグなり握手なりしてこの件は終わりでいいんじやないか？」

咲「はい、これからも仲良くしていきたいです」

淡「まあライバルだしよろしくね」スツ

咲「ごめんね、淡ちゃん」ギュッ

淡「これからは私にも優しくしてよね」ギュッ

咲「うん」

淡「よし、サキさつそく打とう！」

怜「えらい切り替え早いな」

堯深「淡ちゃんのいいところですね」

董「だが待て淡。二人にはまず虎姫以外のチームを回つてもらうことになつてる」

怜「最後に戻つてくるから、楽しみにしどき」

淡「サキもトキも絶対打つてよね」

咲「また後でね」

怜「他のチームには悪いけど、照戦前の最後の調整やな」

咲「本気ですね」

怜「まあな、咲ちゃんもいろんなタイプの雀子と打てる機会やから  
楽しんでな」

咲「はい、がんばります」

怜（頑張つて楽しむのも、変やけど少しずつやな）

（昼休み）

淡「サキー！一緒にご飯食べよ」

咲「うん、怜さんも行きましょう」

怜「大星はもう怖ないんか？」

淡「サキのこと？足が震えるくらい怖いよ」

咲「そんなんに!?」

淡「冗談に決まってるでしょ」

咲「わかんないよ！」

怜「でも大星は積極的やな」

淡「もともと話してみたかったんだよね、でも嫌われると思つてたから」

怜「なんで気になつてたん？」

淡「あとは”宮永照の後継者”的に突然現れたライバルが”宮永照の妹”だつたんだよ。最高じやん！」

怜「確かにできた話やなあ」

咲「私たちつてライバルなの？」

淡「えつ？違うの？」

咲「私まだ一回も淡ちゃんに勝つたことないし・・・」

淡「私が決めたんだからライバルだよ!!」

怜「他にも原村や穂乃ちゃんとかいるけど、咲ちゃんなんか？」

淡「もちろんみんなライバルだよ、でも一番はサキかな」

咲「やつぱりお姉ちゃんの妹だから？」

淡「最初はそうだつたけど、今はサキの麻雀が好き！」

咲「えつ」////////

淡「サキの麻雀は綺麗でかつこよくて強くて・・・そんなのテル以

外にはいないと思つてたのに！」

怜「やっぱり咲ちゃんの麻雀は人を惹き付けるんよ」

咲（私の麻雀が・・・）

淡「スーパーノヴァな私の麻雀に相応しいはサキくらいだよ」ド  
ヤツ

怜「えらい自信家なんやな」

淡「でもライバルには絶対負けないからね。来年のインハイは私が  
団体・個人両方優勝する予定だから！」

咲「そんなの・・・私だつて負けない！」

怜（ウチももつと出たかつたなあ）

（虎姫ルーム）

淡「やつときたー！」

照「さあ咲インハイの分まで打とう」

咲「そうだね、でも負けてあげないよ」ゴゴゴ

照「む、チャンピオンの力を見せてあげる」ゴゴゴ

怜「三人とも元気やなあ」

董「うん？園城寺は入らないのか？」

怜「今日は咲ちゃんと照の対局やから、ウチが入つてもな」  
(メインの対局の前に疲れてまうわけにもいかんしな)

董「そうなのか?ならどっちか入らないか?」

誠子・堯深「先輩どうぞ」フルフルフル

董「・・・ほらしい練習になると思うぞ?」

誠子「躊躇されるだけな気がします」

董「堀深のハーヴェストタイムなら」

堀深「収穫まえに吹き飛ばされます」

誠子「先輩がいつてくださいお願ひします」

董「私に逝けと!」

堀深「私は嫌です」

董「正直だな?!私だつて三人とも怖いんだよ。三人とも本当に麻雀で人を叩き潰せそうじやないか」

照・咲・淡「ゴゴゴゴゴゴ

誠子「どんどんテンション上がつてますよ」ブルブル

董「あれはテンションなのか!?」

照 「董早く入つて、時間がもつたいたい」

董 「」

淡 「サイコロ回すよー」

「対局ダイジェスト」

董 （くそつ、やるからには一矢報い…）

淡 「リーチ!!」

董 （いきなりか、だがまだま…）

咲 「カン！嶺上開花！」

照 「今度は私の番」ゴゴゴ

董 「」

淡 「ダブリーツモドラ4、30000・6000」

照 （止められた）

咲 （すごい…私も！）

淡 「最後も行くよ！リーチ!!」

（これで二人まとめてまくる！）

咲 （オーラスこの手なら和了つて逆転！）

照（速さで勝つ）

「ツモ」

照「500・1000です」

「ダイジエスト終了」

董「シュー」

誠子「先輩大丈夫ですよ、焼鳥なだけですからギリギリとんではいません！」

堯深「それは大丈夫なの？」

咲「勝てなかつたか」

照「危なかつた、最後も紙一重の差だつたと思う。咲強くなつたね」

ナデナデ

咲「お姉ちゃん！・・・お姉ちゃん今対局楽しかつた？」

照「??咲と久しぶりに打てたんだよ、そんなの当然」

咲「お姉ちゃんって二年生になつてからは負けなしだつたよね」

照「ただけど、急にどうしたの？」

咲「その間麻雀はずつと楽しかったの？勝つためには楽しむよりも大事なことってないの？」

照「楽しかったよ」

咲「ずっと同じ繰り返しなのに？」

照「うん。勝ち続けるのはとても大変で、その為にいっぱい練習して牌符の研究して、好きじゃないとそんなことができないとと思う」

照「だから私は麻雀が一番好きで一番楽しんでる人が一番強いと思う」

咲「楽しんでる人が強い……」

照「咲だって麻雀のためにこうやって旅をして、麻雀が楽しいからでしょ」

咲「……私強くなれたのかな？」

照「さつきだって2位だつたでしょ、初めて淡に勝てたんだよ」

咲「そういえば……」

照「咲は強くなつたよ、それにまだ強くなれるよ」

咲「ありがとうございます、お姉ちゃん!!」

淡「いい雰囲気のところ悪いんだけど、『そういえば』ってどういうことかな？サキ？」ニコニコ

咲「あ、ええとそれは・・・」

淡「私なんて眼中にないってこと!? 言つとくけど、まだ私の2勝1敗で勝ち越してるからね!!」 フン

咲「淡ちゃんごめんなさい! あれはお姉ちゃんが気になつてたから  
⋮」

淡「やつぱり私のこと気にしても無かつたんだ!!」

堯深「淡ちゃん、どんまい」 クスツ

淡「今笑つたでしょ!? サキに相手にされない私を!」

怜「自分で言つて悲しくならんか?」

淡「なるに決まってるじゃん! 私は悲しい!!」

誠子「見事な空元氣だな」

淡「もういいよ、ライバルだと思つてたのは私だけだつたんだね」  
ハア

咲「淡ちゃん!? 隅っこ行かないで、ほら私たちは永遠のライバルだ  
からね」

怜「さてと次はウチやな」

誠子「あれはほつといていいんですか?」

怜「咲ちゃんがいれば問題ないやろ。照まだ全力で打てるやんな  
？」

照「もちろん。怜と打つのも楽しみにしてた」

怜「なら照には真剣に勝負を申し込むで」

怜「私はいつも真剣に打つてるけど？」

怜「本気の本気で勝負しようってことや」

照「でも・・・」

怜「自分のことは自分が一番わかる。今ならインハイのようにはならへん」

照「・・・」

怜「なら賭けでもしよか？」

照「賭け？」

怜「照が勝つたら何でも言うこと聞いたる、でウチが勝つたら咲ちゃんもらおか」

咲「・・・」

照「ふざけてるの？」ゴゴゴ

怜「こうでもせんと受けてくれそうにないからな」

董「ちよつとまでお前ら。常識的に考えろ、咲ちゃんを賭けの材料になんて」

咲「私はいいですよ・・・その賭けお受けします」

董「何つ!？」

怜「・・・」

照「・・・」ゴゴゴ

董「園城寺本氣なのか、おい照もなんか言え！」

照「わかつた。その勝負受けるよ」

董「おい！何を言つてるのかわかつてるのか!?」

照「董、落ち着いて。多分私たちには分からぬ何かがあるんだよ」

董「何かって・・・お前」

照「それに私が勝てばなんの問題もない」ゴゴゴ

怜「よしじやあさつそく」

照「待つて、勝負は明日にしよう。同卓する人も賭けのことを知らない人を私が用意する」

怜「なるほどな、だけど照と打てる人なんて誰呼ぶ気なんや?」

照「まだ憩と和がこつちにいるから明日来てもらう」

董 「本気なのか？」

怜「インハイ個人戦上位3人をまとめて相手できるなんて願つたり叶つたりやな」

淡 「サキはほんとにいいの？」

咲 「はい。これもきっと必要な事なんです」

怜（照にも咲にも感謝やな、こんなわがまま叶えて貰つて。竜華、咲見ててや必ず勝つから）

## 白糸台の巻2

「虎姫ルーム」

咲「おはようございます」

董「おはよう、照は今例の2人を迎えている。準備は大丈夫なのか？」

怜「もちろん。いつでもどんと来いや」

誠子「あの弘世先輩、本当にやるんですか？」

董「不安しかないが、見てないところで勝手にやられるよりいいだろ」

堯深「賭けなんて監督にも言えませんよね」

董「ああ、だから内密にな。特に淡、お前は口が軽いからな」

淡「コクコク

堀深「別に喋っちゃいけない訳じやないと思うよ」

淡「コクコク

ガラガラ

照「みんな、おはよう。待たせちゃったかな」

憩「おはようさんですーう」

和「おはようございます」

怜「憩ちゃん、久しぶりやな」

憩「今日は全力で相手してくれはるんですよ、楽しみですよーう」

怜「憩ちゃんの本気は怖いなあ、お手柔らかに頼むよ」

咲「和ちゃん久しぶり。テレビみんなで見てたよ」

和「なんだか恥ずかしいですね」

咲「牌のお姉さんもできるつてみんな言つてたよ」

和「あれは…私にはまだ早いです」

咲「そうかなあ、似合うと思うけどな」

照「和、そろそろ始めるよ」

和「はい、今行きます」

咲「頑張つてね」

照「さつ…始めよう」

怜「せやな」

和（急に空気が重くなりましたね）

憩（このメンバーで打つなら、真剣になるのもわかるけど、やけに

緊張しとんな)

照「サイコロ回すよ」

対局開始

起家：照

南家：憩

西家：怜

北家：和

照「・・・」

怜（照の起家か、こればっかりはラッキーやな）

憩（最初は和了りたいとこやけど、うちも能力使えんしなあ）

和（何か事情がありそうですが、私はいつも通り打つだけですね）

怜（最初に稼がせてもらうで、ダブル！2巡先や！）

7 巡目

和「立直」タン

怜（さすがに速いな、せやけどウチの方が一手速かつたみたいやで）

怜「立直！」

和「・・・」タン

照「タン

憩「タン

怜「ツモ!!倍満で4000・8000や」

照	17000	—8000
憩	21000	—4000
怜	42000	+17000
和	20000	—5000

怜（とりあえず先制できたけど、こつからが本番やな）チラツ

照「・・・ゴゴゴゴゴゴ

怜（照には今のウチはどう写ってんやろな）

憩（何度も体感してもなれんなあこれ）

照「・・・」

（別室）

咲「中継で見れるなんて、さすが白糸台ですね」

淡「でしょでしょ」

董「もともとは校内の代表決定戦などを録画するための設備だが  
な」

誠子「でもいきなりの倍満は驚きましたね」

淡「テルならそのくらい直ぐに取り返せるんじやない?」

堯深「でもあの3人相手にそんなに上手くいくかな?」

淡「親が1回なのはちょっと不安だけど、もし止められてもアレがあるし」

董「最初の連荘でどの程度稼げるかだな、跳満まで行ければ勝てるんじゃないかな」

誠子「園城寺さんも調子よさそうですよ？」

咲「朝から気合い入つてましたからね。無理しなければいいんですけど・・・」

「ロン」

誠子「と、さつそく連荘ですね」

「対局室」

照「ロン。2600」

照	20700	+	2600
憩	17900	-	2600
怜	41700		
和	19700		

憩「あいかわらず速すぎですよーう」

怜「ウチの親やつたんやけどなあ」

憩（けつこう本氣で和了りにいつたんやけどなあ、あつというまに2連続かい）

照「・・・」

（東4局・親和）

和「・・・」タン

照「・・・」タン

憩（速さで勝てないなら火力で勝つ）タン

怜（ここつて止めない方が返つてええんやろか？）タン

照「ツモ。1000・2000」

和	怜	憩	照
1 7 7 0 0	4 0 7 0 0	1 6 9 0 0	2 4 7 0 0
		— 1 0 0 0	+ 4 0 0 0

怜（ここまで想定通りや。次はおそらく12000が来る）

憩（簡単に4連続和了なんてさせへん）

怜・憩（ここで止める！）

（南1局・親照）

照「・・・」タン

憩「・・・」ゴゴゴ

怜（憩ちゃんもやる気やな、よしダブルや！）タン

和「・・・」フム

憩（火力は十分、あとは・・・）つ3筒

怜「チー」

和「・・・」つ8萬

怜「ポンや」タン

怜（よし、順調に鳴けとる。とにかくスピードで）

照「・・・」タン

憩（喰い断で速上がりやろか？怜さんにポンされるとちょおきつい  
な）タン

怜「原村、それポンや」テンパイ

怜（ダブル！待ちはどつちが・・・くつ！2巡後に照か、それに原  
村まで）タン

和「立直」カチヤ

照「・・・」タン

憩（和も速いなあ・・・照ももう聴牌つてるんやろな）

怜（次の原村の牌を鳴いて・・・）タン

和「・・・」タン

怜「ポンや」タン

憩（裸単騎!?鳴かなかつたらどつちかが和了るいうことなんか?）

和「・・・」ツモギリ

照「・・・ツモ。4000オール」

怜（やつぱりずらしてもダメかい）

照	3	7	7	0	0
憩	1	2	9	0	0
怜	3	6	7	0	0
和	1	2	7	0	0
	—	—	—	—	—
	5	0	0	0	0

（別室）

淡「あつという間に逆転♪」

堯深「宮永先輩、さすがです・・・」ズズ

董「園城寺も全力で止めに行つたみたいだがな」

誠子「裸単騎は珍しいですね」

咲「あれはお姉ちゃん対策の1つですね。以前の怜さんならあそこまでは鳴かないと思います」

淡「対策?他にはどんなのあるの?」

咲「対策と言つても、昨日の夜に怜さんが今できることで、使えそうなものをまとめただけですよ」

董「それも恐らくは照魔鏡で見破っていたのだろうな、下手をすればこのまま終わるんじゃないか」

咲「怜さんと憩さんとが噛み合えばいいんですけど・・・」

（南1局一本場）

照「・・・」ゴゴゴ

憩（好き勝手させへん）ゴゴゴゴゴ

怜（ウチの鳴き麻雀じやまだ力不足なんか、今度は・・・）タン

和（少し付いていませんね）タン

憩「ポン」

憩（怜さんわざとやろな、うちが欲しいところを捨ててる）タン

怜（ウチ一人でおよばんかつたのは悔しいけど、ここを和了られるわけにもいかんし。憩ちゃんに頼らせてもらうわ）

和「・・・」タン

照「槇」ゴゴゴ

憩（先に和了られると思うて、無理矢理打点上げにきたんやろか）

怜（よしダブル！・・・!?) フラツ

怜（5萬でタンヤオドラ5直撃かいな、憩ちゃんに鳴かせたかった  
どこやけどしつかり狙つてきどるな、でも）つ1筒

和「・・・」タン

怜（憩ちゃんナイスポンや、これで終わりやな。せやけどだんだん  
辛なつてきたな）

憩「ポン」タン

怜「チー」タン

和「・・・」タン

照「・・・」タン

憩「ツモ!!30000・60000の一本場は3100・6100!!」ゴ  
ゴ

照（これは・・・まずいかも、あと3局。もし一回でも和了られた  
ら）

和	9	6	0	0	—	3	1	0	0
怜	3	3	6	0	—	2	5	2	0
憩	6	0	0	0	+	2	0	0	0
照	0	0	0	0		1	2	3	0
						0	0	0	0

董「・・・」

堯深「終わりませんでしたね・・・」ズズ

淡「何あれ?」

咲「憩さんの力と怜さんが上手くはまりましたね。お姉ちゃんも無理に追いかけましたけど追い付きませんでしたね」

淡「そうじゃなくて、テルとトキの勝負なのになんかズルくない!?」

誠子「荒川さんと原村さんは勝負のこと知らないんだし、しようがないだろ」

堀深「麻雀は4人でやるものだよ」

淡「そただけどさつ・・・」

董「まあ淡の言いたいことも分かるがな。周りを使うだけでは照には勝てないさ」

咲「怜さんだつて分かつてますよ。あと3局きつとやつてくれます」

淡「サキは怜に勝つて欲しいんだね」

咲「うん、怜さんには負けないでほしい。今日勝てればきっと怜さんの願いも叶うから」

淡「テルが聞いたら嫉妬しちゃいそうだね」

「ロン」

誠子「えつ・・・・」

堯深「これは・・・・」

「対局室」

和「2000です」

憩「はい」

和「ラス親ですから、私もまだ負けてませんよ」

憩（舐めてた訳やないけど、ここまでか）

照（やられた。怜の鳴き麻雀と憩の能力に気をとられ過ぎたか？）

怜（これは・・・末恐ろしいな。今まで一番照に食らいついとつたしな）

照（あと2局で負けてる・・・このまま連続和了の速さで勝負？それとも・・・）

「別室」

董「驚いたな。照より速いのか」

淡「トキとケイ気にしすぎてない？ テルらしくない。いつもならまとめて潰せてた」

誠子「先輩だつて緊張したり怯んだりする事もあるんだろ、きっと」

堺深「南1局一本場を止められたのが、私たちが思うよりショックだつたのかな?」

咲「それもあると思いますけど、和ちゃんはやっぱりすごいです。牌に愛された子って呼び名は和ちゃんが一番しつくり来ると思います」

董「完璧なデジタルに牌が応えるか・・・」

淡「でもノドカのおかげでアレが見れそう、テルなら今度こそまとめて潰すよ」

「対局室」

怜（ここまで7局そろそろヤバイか・・・リードしてここまできたんや負けられへん、たとえ・・・）

照（・・・私は負けない）ゴゴゴゴゴゴ

憩（ここまで来て、とんでもないなあ）

怜（間違いなく今までで最高のプレッシャー、なんやこれ？）

照「・・・ギギギ

ギイ

「南3局・親怜」

怜（配牌が特別悪いゆうことはないな）

和「キヨロキヨロ

怜「どうかしたんか？」

和「いえ、照明が急に暗くなつた気がして……」

怜（そういえば……そんな気もするな。今はそれより照や、ダブル2巡先や!!）

照「・・・」ギギギ

憩（配牌は悪かつたけど、大星ほどではない。何しとるんや？）

怜（ここまで静かなもんやな、プレッシャーは続いとるけど動きはない。気になるといえどここまで有効牌が来とらんこと、というより2巡後にも来てない。ここまで来て運に見放されるとるな）

和（手の進みが遅いですが、この程度はよくあることですね）

照「・・・」ギギギ

（別室）

咲「・・・」

淡「サキ、テルの奥の手はどう？」

咲「すごく・・・やつかいな力、連續和了みたいに派手じやないけど間違なく強い」

董「咲ちゃんはアレが何をやつてているのかわかるのか？」

咲「大体ですが、はい」

董「すごいな、私たちでも完全には把握できていないだが……」

淡「だから言つてることは抽象的すぎて分かんないんだよ、もつと

誠子「淡の言つてることは抽象的すぎて分かんないんだよ、もつと具体的に頼む」

淡「具体的に？うーん、あれは私の絶対安全圏とか天江衣とかに近いんじゃないかな」

堯深「でも配牌はそこまで悪くないし、有効牌だつて少ないけど、さつき原村さんはツモつてたよ」

淡「そなんだけど、何というか……サキ！バス！」

咲「バスつて……アレはおそらく他家に役を作りにくくさせるものだと思います。配牌が少し悪くなつたり有効牌の減少はその影響かと」

淡「そう！ それそれ！」

董「役を……照の手のドラ3もその影響か」

咲「はい、ただ完全に発動するまでには時間がかかるみたいですけど」

堯深「原村さんの手は平和がつきそつだし、先輩のドラが3つだけなのはまだ不完全だから……??」

誠子「完全に発動したらどうなるんだ?」

咲「“役の独占”……お姉ちゃん以外はツモと立直くらいしか役ができなくなると思います」

（対局室）

照「・・・」ギギギ

憩（プレッシャーどんどん強うなつてますやん、手も進まなくなつてきたし）タン

怜（照が何かやつてるのは間違いない。さつきから未来を見ても無駄ツモばつかり、精神的に参つてくるわ。体力もあと少しやつていうのに）クラツ

和（進みませんね・・・）

照「・・・」ギギギ

憩（怜さんも辛そうやな、早めに仕掛けるべきやつたやろか）

怜（プレッシャーもきつなつてきたわ、けどまだまだ！ダブルや・・・）クツ

怜（はあはあ・・・2巡後に聴牌や、あとは照がどうでるか？）タン

和「・・・」タン

照「・・・」ギギギ

憩（本当に暗くなつてきてへんか?）タン

怜（この巡は見れへんけど、次でもう一回見て照を超える）タン

和「・・・」タン

照「・・・」ギギギ

憩（そろそろ何かありそうやな）

怜（よし聴牌、照はプレツシャーがさらに強くなつとるけど、まだ動きはなし。一気に決めたるダブル!! 2巡先や!!）グラッ

怜「くつ・・・」

憩「ちよ、怜さん大丈夫ですか?」アブナイ

怜「あ、ああ大丈夫やよ。続けるで・・・」

怜（・・・未来が、2巡先が見えんかつた。ショックで倒れそうになつてしまたけど、ウチの体力のせいやない、多分照が次巡に何かしたんや）タン

和「・・・」タン

怜（さあ、何がくる?）

照「ツモ」ギギイ

照「平和三色ドラ3で30000・60000」ギイ

和	怜	憩	照	4	3	6	0	0	+ 1
8	6	2	2	0	2	0	0	0	2 0
6	0	7	6	0	7	6	0	0	0 0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 0
		—	—	—	—	—	—	—	—
		3	0	0	6	0	0	0	2 0
		0	0	0	0	0	0	0	0 0

憩（なんや？ただの跳満？）

フツ

怜「!?」

チカツ

怜（今一瞬部屋が真っ暗になつたような、氣のせいやろか）

照「・・・」ゴゴゴゴ

怜（とんでもないプレッシャーなのに壁を一枚挟んでいるような感覚、なんや照がよく見えない）

照「これで最後」ゴゴゴゴ

ギイ

バタン

（別室）

咲「怜さん・・・」

淡「完成したね」

董「役の独占なんてどうしようもないだろ、さすがに照の勝ちだな」  
誠子「役を独占するために他家の有効牌の減少と悪配牌が厄介です  
よね」

堯深「でもそんなに強い力なら今まであまり使わなかつたのは何で  
でしようか?」

誠子「うーん? 最近完成したばかりとか?」

淡「それは違うかな。前にも見たことがあるし」

董「普通に考えれば何らかのリスクがあるんだろう。あれだけ大き  
な力だきつとリスクも大きくなるんじやないか?」

誠子「それを見つけられれば、まだわかりませんね」

堀深「あれを初めて見て弱点まで見つけるなんてできるのかな?」

淡「できなければ負けるだけだよ」

咲(・・・怜さんなら大丈夫です、きっとできます)

咲「・・・頑張れ」

（南4局・親和）  
和「・・・タン

照「・・・」ゴゴゴゴゴ

憩（うちの能力きいとらんな、酷い配牌や）タン

怜（未来見ても照以外はツモ切りだけ、おそらくウチ以外の配牌も酷いんやろな。こんなんどうしたらええんやろな）タン

怜（有効牌が少ないだけで来ない訳じゃないなのは幸いやな、これでどうにか一向聴や。せやけどこのままじや1000点にしかならんし、もうダブルも限界や使ってもあと1、2回つてどこか。ここまで勝てる気がしないのは龍門渕透華いらいやな）

照「・・・」ゴゴゴ

怜（龍門渕・・・“相手を見透かす”か。とにかくダブルや、最後まであきらめるな・・・照だつて有利な状況でも必死に打つとる。ウチも必死になれ、最後まで逆転の手を考えるんや）タン

和「・・・」タン

照「・・・」ゴゴゴ

憩「チー」タン

照「・・・」

怜（今のチー、照は必死というより焦つてるようにも見えるな、速く終わらせたいみたいな。何かこの力をインハイの時に使わんかった訳があるのか。気のせいかもしけんけど、少しでも可能性があるな

ら・・・）タン

和「・・・」タン

照「・・・」ツモギリ

憩「・・・」タン

怜（ダブル！！・・・2巡後に照のツモで終わりか。でもまだや、次巡にウチも聴牌や。さつきの照はツモ切りやつた、おそらく原村のツモが照に行つたから。でも照の捨て牌はウチらの有効牌にはほとんどなつてないから直撃は取れないし、打点も足らんなら一か八か・・・）

和「・・・」タン

照（これで聴牌。次で決める）タン

憩「・・・」タン

怜「チー」

怜（これで役無し聴牌。やけど原村のツモが照に行くはず・・・）

和「・・・」タン

照（・・・これでは和了れない。でも怜の有効牌でもないはず、そもそも役無しじや和了れないし、仮に直撃されても私の勝ち）タン

怜（この先がどうなるかはウチにも分らへん。あとは神頼みやな、いや咲ちゃん頼む力を貸してや）

怜「槇!!」

照「なつ・・・」

照（明槇じや手は進んでないし、役もつかない有効牌とはいえないのか）

怜「・・・」

怜（この旅の最後や、協力してくれたみんなのお陰でここまで來れた。照を倒してウチはプロになる!!）

怜「・・・」

怜「ツモ、ドラ3、嶺上開花。8000や」

和	怜	憩	照	3	5	6	0	0
8	6	0	0	2	0	2	0	0
0	0	0	0	+8	0	0	0	0

## 白糸台の巻3

「対局室」

和「・・・」

憩「・・・引き分けとは、また」

照「・・・違う、上家取りで私の勝ち」

怜「負けず嫌いやなあ、ええやんか引き分けでも」

照「ダメ、勝負に負けた感じなのに試合にも負けたくない」

怜「ならウチの勝ちでええやん、最後は我ながらいい和了りだつた  
と思うで」

憩「確かに凄かつたなあ、照さんの勝ちで決まつたと思つとつたわ」

照「それでもダメ、だつて負けたら咲がとられちゃう・・・」

和「ピクツ

怜「約束やもんな、じやあ咲ちゃんはウチ 「待つてください!!」

和「約束つて何ですか!?聞いてませんよ!」

怜「言つてないからな」

和「言つてくださいよ!」

照「咲は私の妹。引き分けじやあげるわけにはいかない」

和「聞いてください!!」

憩「どんな約束やつたんですかーあ？気になりますう」

怜「ただウチが勝つたら咲ちゃんをもらう、負けたら何でも言う」と聞くつてだけやで」

和「“もうう”って何ですか？咲さんはそんな賭けに乗ったんですか？」

憩「あんまりカリカリしてもいいことないで」

怜「もちろん咲ちゃんも了解済みやしな」

和「なんですか咲さん・・・私に相談してくれれば」

怜「別に強制しどらんからな、相談しても変わらんかつたと思うで」

照「そう、私に相談するべきだつた。そうすればこうなることもなかつた」

怜「ウチを悪者みたいに言うの止めーや」

憩「ここで言つたつて変わらんで、咲ちゃんに聞いてみればええやんな？」

（別室）

咲「・・・」

淡「すごいすごい、何あれ!? サキ!! 今のどうやつたの？」キラキラ

董「コラ、空氣を読め。咲ちゃん考え事してるだろ」

咲「大丈夫ですよ、董さん。あの嶺上は単純に運が怜さんの身方をしたんだと思うよ」

淡「でも何でドラ乗つたんだろう？ テルが止めてたと思つたけど」

咲「聞いてみないと判らないけど、あの能力はまだ未完成もしくは調整不足なんじやないかな。あまり実戦では使つてなかつたみたいだし」

董「あれよりもまだ上があるのか・・・」

誠子「何と言うかさすが先輩ですね」

堯深「底が知れない・・・」

淡「早く打つてみたい！ テルにお願いしないと！」

咲「淡ちゃんは麻雀打つのが好きなんだね」 フフフ

淡「当たり前じやん、私は宮永照の後継者だからね」 ドヤ

誠子「それにしてもどうなるんでしょうか？」

堀深「上家取りなら先輩の勝ちですね」

董「だが園城寺は納得しないだろうな」

淡「サキが決めればいいじやん、それなら二人とも文句無いでしょ」

照 「その通り、咲に決めてほしい」

怜 「咲ちゃんの思うようにしてくれてええよ」

咲 「お姉ちゃん、怜さん・・・」

淡 「どうするの？」

咲 「引き分けじやダメですか？」

怜 「まあ咲ちゃんが言うならええか？」

照 「そうだね、咲が言うなら仕方ない」

董 「二人ともやけに素直じゃないか」

憩 「二人とも心の中では自分が負けたと思ってるからやと思いませんよ」

誠子 「どつちも十分勝ちに値する内容だつたと思うけどな」

堯深 「みなさん、お茶用意しましたよ」 ドウゾ

「しばらく後」

咲 「和ちゃん久しぶりだね」

和 「そうですね、だいたい2週間ぶりでしょうか。しかし賭けなんて驚きましたよ」

咲「ごめんね、巻き込んでやつて」

和「簡単に賭けなんて許したらダメですよ。みんな心配しますか  
ら」

咲「怜さんにも同じようなこと言われたよ」

和「あの人は…」

咲「それより和ちゃんはまだ東京にいたんだね。朝ビックリし  
ちゃつたよ」

和「少し用事がありまして、その事で少し報告したいことがあります」

咲「なになに？ テレビの事とか？」

和「実は転校先がきまりまして、来年から白糸台高校に通うことにな  
なりました」

咲「おめでとう！ お姉ちゃんも良い高校だつて言つてたし、淡ちや  
んもいるしそういよ！」

和「まだもう1つあります…」

咲「えつ？」

和「お父さんが麻雀を続けることを許してくれました。学業を優先  
する条件付きですが、白糸台麻雀部に入ります」

咲「ホントに!? 麻雀続けられるの？」

和「ええ。来年は白糸台の4連覇に貢献できればと思っています」

咲「よかつた・・・よかつたよ」ウルツ

和「ですから、咲さんもあまり気にしないでください。インターハイで負けたのも、咲さんのせいじゃありません。あれは清澄高校みんなの敗けです」

咲「和ちゃん・・・」

和「あまり引きずつていると、来年は天江さんに敗けてしまいますよ」

咲「そんな、やだよ。衣ちゃんには負けたくない」

和「私は来年もインターハイに出ます。だから会いに来てください、待つてますから」

咲「うん！私は衣ちゃんを倒してインターハイに出るから、和ちゃんも必ず来てね。約束！」スツ

和「はい、約束します。来年もインターハイで！」ユビキリ

（練習終了）

怜「今日はおおきに。いいの練習になつたわ」

董「それはよかつた。こちらこそみんな練習になつたと思う」

照「怜、今日は楽しかった、そのうちまた打とう」

董 「春休みも長いし、大阪に卒業旅行でも行くか？」

照 「それいいね。たこ焼きにお好み焼き、今から楽しみ」

怜 「意外と食いしん坊なんか？」

董 「甘いものなら無限に食えそうなやつだからな」

照 「さすがに限界はある・・・たぶん」ボソ

怜 「たぶんて・・・」

董 「太らないのが本当に不思議だよ」

怜 「ほんまやな。というか照は春休み忙しくないんか？」

照 「なんで??」

怜 「プロ注目の超大型ルーキー様やろ、旅行なんてしてる暇ないん  
ちやう？」

照 「さすがに大丈夫なはず・・・」

董 「照がダメなら淡でも誘つて行くさ」

照 「そんな・・・ガーン

怜 「まあ期待せんで待つとるよ」フリフリ

照 「絶対行くから！」

董 「ほら落ち着け、プロになればいくらでも行けるだろ」

照 「それとこれとは全然違うから」

怜 「・・・なあ照」

照 「なに?」

怜 「わかつてるとと思うけど、まだ賭けは終わってへんからな」

董 「なつ!」

照 「いつでも挑めばいい。次は今日みたいにはいかない」

怜 「随分な自信やな」

照 「そつちこそ大丈夫? 私がプロになつたら、そう簡単には対局で  
きなくなるけど」

怜 「わかつとる、だからここで宣言しとくわ」

照 「うん?」

怜 「ウチも必ずプロになる! だから首洗つて待つとき」

董 「そんな簡単に

照 「わかつた、私も次までには能力を十二分に使えるようにしてお

く

怜「こつちも攻略法考えとくで」

照「次こそは私が勝つ」

董「・・・もう勝手にしてくれ」

♪最後に♪

咲「今日はありがとうございました」

堯深「こちらこそありがとうございます」

誠子「いい練習になつたよ、いつでもまた来ててくれ歓迎するよ」

咲「ぜひまた来たいです、あと少しですけどお姉ちゃんをお願いします」

淡「言われなくとも大丈夫だよ、サキも次会うときにはまた対局するからね」

咲「うん、楽しみにしてる。あと和ちゃんを来年からよろしくね」

淡「エースの座は譲らないけどね。サキ来年も絶対にインハイで戦うから負けないでよね」

咲「そつちこそ私と当たるまでに負けないでね。それでは亦野さん、渋谷さんありがとうございました。またインハイで会いましたよう」

堯深「うん、楽しみにしてるね」

誠子 「それじゃあね」バイバイ

## エピローグ

「最後の日・ホテル」

怜「咲ちゃんごめんな」

咲「えつ？ 何の話ですか？」

怜「照に勝てなくてごめんな。あんな賭けまでして本気でやつても  
らつたのにな」

咲「私もある能力には驚きましたし、初見で同点にした怜さんが凄  
いです」

怜「そう言つてもらえるのは嬉しいけどな、あの試合は運が完全にウ  
チの身方をしどつた。照は起家やつたし、懇ちゃんと原村にも助けら  
れた。最後の嶺上だつて見えてた訳や無い」

咲「それでも、」

怜「それでも、勝てなかつたんや。改めて実力差を見せつけられた  
氣分や」

咲「運だつていいじゃないですか。麻雀つて運が7割なんて言ひ方  
もされますし。引き分けでも怜さんは間違いなくトップでしたよ」

怜「そなんかな・・・」

咲「そんなんに勝ちたかったんですか？」

怜「当たり前や！」

咲「そうですね、勝てればプロ入りもほぼ間違い無いですもんね」

怜「そうやないで、大事なもの賭けてたからや」

咲「へ？」

怜「咲ちゃんが賭かつてたんやで、敗けるわけにはいかんやろ」

咲「そんな」////////

怜「咲ちゃんはウチにとつて勝利の女神様やからな、簡単に手放す訳にはいかんやろ」

咲「女神だなんて言い過ぎです」////////

怜「咲ちゃんと仲良くなつてから、この旅も上手くいつたし。最後の嶺上だつて咲ちゃんが和了させてくれたんちやうか？」

咲「そんなことできるわけ無いじゃないですか」

怜「いや分からんで。嶺上に関しては鬼より恐い咲ちゃんやからな」

咲「どういう意味ですか！」

怜「そのまんまの意味や。対局中はホントに鬼かと思うときあるで」

咲「女神とか鬼とか私を何だと思つてるんですか!?」ゴゴゴ

怜「知つとるか、普通の人はオーラなんて出せないんやで？」

咲「・・・もういいです」ハア

怜「勝利の女神なのは本当やからな」

咲「はいはい、ありがとうございます」

怜「なあ咲ちゃん、引き分けとはいえたツップやつたわけやしトップ賞とかないんか？」

咲「切り替え早くないですか!?」

怜「関西人やからな」

咲「関係ないですよね!？」

怜「ワクワク

咲「トップ賞?・・・ひざ枕とかどうですか?」

怜「そうそろひざ枕とか・・・えつ!?やつてくれるんか?」キラキラ

ラ

咲「そんなに期待されるとやりづらいです」

怜「ほな速く」ゴロゴロ

咲「はやつ!？」

「ひざ枕中」

怜「ええなあ、ええなあ」ゴロゴロ

咲「変態ですか?」ナデナデ

怜「咲ちゃんがなかなかしてくれへんかつたからな。ウチの方が先にするとは思わんかったな」ゴロゴロ

咲「今日は疲れたでしようし、多目に見ますよ」ナデナデ

怜「確かにそこそこ疲れたなあ」

怜「強がらないでいいですよ、お姉ちゃんとの対局以降は一度も能力使つてませんよね?」

怜「バレてた?」

咲「はい、見てましたから」

怜「そんな熱い視線向けられると照れるで」

咲「・・・」

怜「冷たい視線向けるのはやめてや」

咲「はあ」

怜「照戦の最後は止められるかと思つたわ、南3局でわりと限界やつたし」

咲「迷いましたけど、怜さんを信じると約束しましたから」

怜「やっぱりウチが信じた咲ちゃんやな」

咲「でもあんなに心配させるのはもうやめてくださいね」

怜「モウシマセン」メソラシ

咲「懲りないです」ハア

怜「これからプロになろうとしてるんやで、どうなるかわからんやろ」

咲「じやあ心配が無いくらい強くなつて下さい、特訓には何時でも付き合いますから」ナデナデ

怜「・・・やっぱ女神やな」

咲「女神のひざ枕は貴重ですね」ナデナデ

怜「満更でもないやん」

咲「そういうえば怜さん、賭けは継続になつたんですね」

怜「話聞いてつたんか?」

咲「董さんから聞きましたよ。私も当事者なんですから相談くらいてくださいよ」

怜「昨日は勢いでOK貰つたけど、冷静になつたら止めるやろ?」

咲「どうでしょう?でも決まっちゃつたのならしようがないですか

ら、継続でもいいですよ」

怜「やっぱり咲ちゃんガードが緩すぎやな、変な人に引っかかるで」

咲「変な人が言わないで下さい」

怜「・・・」

咲「・・・」

怜「最後も変わらんなあ」

咲「そうですね・・・本当に終わるんですよね?」

怜「今日でこの旅は終わりや」

咲「・・・私こんなに楽しかった冬休みは初めてです。ありがとうございます」

怜「ウチも楽しかったで、ありがとうな」

咲「・・・」

怜「・・・」

咲「・・・終わりたくないです」

怜「咲ちゃん?」

咲「宮守の姉帯さんに会いに行きましょう!有珠山の獅子原さんとかもいいかもしません。北海道はちょっと遠いんですけど、なんとか

なりますよ！」

怜「面白そうやけど無理やな」

咲「そんな」

怜「学校あるやろ？」

咲「少しくらい休んでも」

怜「とんだ不良生徒やな、でもダメや。清澄のみんなだつて咲ちゃんの帰りを待つてんやで？」

咲「・・・」

怜「咲ちやんだつて本当は分かってるやろ」

咲「・・・はい」

怜「プレゼント交換もしたし、頻繁には無理でも会おうと思えば会えるんやから」

咲「そうですよね」

怜「寂しくなつたら大阪に来たらええよ」

咲「はい！」

咲「プレゼント交換と言えば、預かつたブレスレット返して無いですね」

咲「ブレスレット返して無いで

怜「あー、あつたなーそんなの」

咲「忘れてたんですか」ハア

怜「返さんでええよ、そのままあげる」

咲「・・・ウーン

怜「どないした?」

咲「やつぱり貰えません」

怜「せやつたら返してくれるんか?」

咲「今は自宅にあるので返せません。だから取りに来てください」

怜「直ぐには行けんよ、いろいろ忙しくなると思うし」

咲「はい。プロ試験があつて、受かればプロ入りの準備と暇が無い  
ですね」

怜「そうや」??

咲「だから・・・」

咲「時間がかかるてもいいです。お姉ちゃんにしつかり勝つてから  
取りに来てください」

怜「・・・それは」

咲「ダメ・・・ですか?」ジー

怜「いつになるか分からんけど・・・それまで預けとくから大事に  
しどつてや」

咲「はい!!!」

怜「ふあ〜」

咲「眠いんですか?」ナデナデ

怜「照にしばかれて、疲れたからな」

咲「引き分けでその言い草はお姉ちゃん怒りますよ」

怜「向こうは元気一杯やつたけどな」

咲「このまま眠っちゃつていいでですよ」ドウゾ

怜「・・・」

咲「何ですか？」

怜「咲ちゃん、ウチはプロになれるやろか？」

咲「今さら不安になつてるんですか？」

怜「確かに照と引き分けたけど、絶対はないやろ？」

咲「大丈夫です!!」ナデナデ

怜「自信たっぷりやなあ」

咲「なんたつて勝利の女神が見守つてますから」ドヤ

怜「ふふふ、なら安心やな」スー

咲「はい。おやすみなさい」ナデナデ

怜「z z z」

咲「待つてますから、必ず取りに来てくださいね」ナデナデ

怜（プロになつて照に勝つて行くから、約束や）

怜「z z z」